



14-226
1200701592245

14
226



始



14
226

工 T 21

哲學館 崇正學堂
高等教育學科講義錄

社會學

辰巳小次郎

社會學

社會學目次

第一章	總論	一
第二章	社會現象の部類	一一
第三章	野蠻人の牀格	一七
第四章	野蠻人の情感	二二
第五章	野蠻人の智識	二六
第六章	野蠻人の思想	二七
第七章	死生の思想	三〇
第八章	冥界の思想	三三
第九章	鬼神の思想	三七
第十章	宗教の思想	三八
(一)	祖先教	三八
(二)	偶像教並に奇物教	三九
(三)	禽獸教	四〇



次 目 學 會 社

(六) (五) (四)

第十一章

社會の進化

植物教……………四一
 萬物教……………四二
 神教……………四三

第一節

社會の有機性……………四六

第二節

社會の成長……………五一

第三節

社會の組織……………五四

第四節

社會の作用……………五七

第五節

社會の諸機關……………六〇

第六節

保養機……………六一

第七節

運輸機……………六四

第八節

整理機……………六六

第九節

社會の種類……………七〇

第十二章

男女の異同

第一節……………七六
 心臓組織の異同……………七六
 心臓効用の異同……………七七

次 目 學 會 社

第十三章

家族の組織

第三節……………七八
 美勝醜敗論……………七八
 第四節……………八三
 婦女の嗜好……………八三
 第五節……………八五
 男女相異の結果……………八五

第一節

總論……………八六

第二節

男女の關係……………九二

第三節

婚姻の種類……………九五

第四節

家族の種類……………一〇七

第十四章

人天の關係

……………一〇八

社會學目次終

社會學

文學士 辰巳小次郎 講義

第一章 總論

社會學とは英語にソシオロジーと云ふ學問にして世間或は之を譯して世態學
 と云ふ社會の發達進化盛衰成敗する原理定則を研究する學問なり社會とは人類
 群居して相生養し相保全する所以の組織なり社會は國と云ふとに非ず國民と云
 ふとに非ず國と云ひ國民と云ひ其意義の由て生ずる所は一定の政體一定の土地
 一定の人民を有するに在れども社會は意義之より廣大にして政體土地人民の一
 定すると然らざるを論せざるなり人類團結の發達進化盛衰成敗する所以の大
 要を論究するなり國は時として政府と云ふ意義を有するとなり國民は幾分進化
 したる人民を云ふ社會は數多の機關を備へ政府を以て其一機關とするか故に決
 して政府と同一物と視做すを得ず又社會には未だ進化せざるもあり既に進化せ
 るもあり國と云ひ國民と云ひ政體に係はり政體は重に男子の組織する所なれば

國並に國民を論究する時は女子の上に論し及ふと甚た少し然るに社會は男女の共に組織する所なれば社會の研究は必ず男女相關の研究を要するなり

凡そ進化に三種あり一に無機物の進化二に有機物の進化三に有機物の境界を離脱せる物則ち有機物の群集して組織せる社會の進化是なり有機物の群集して組織せる社會は有機物の境界を離脱せる物なれば今假に名けて出機物と云ふべし(佛書に世間出世間と云ふ語あるに倣ひたる迄にて適當したる譯とは思はず)夫れ一箇の有機物にして其始生の時より其衰亡の時迄に種々の變遷推移を経るは是れ有機物の進化なり此進化の原理定則を研究するは有機物の進化を研究するに非ず又二種以上の有機物にして相互に及ぼす關係も亦有機物の境界を離脱せざる事實なり牝牡にして其兒を養ふには一種の同心協力に由れるも是れ亦有機物の境界を離脱せざる事實なり社會即ち出機物の作用は牝牡の共に其兒を養ふとより遙に複雑せる者なり固より有機物の作用と出機物の作用との相異なる所を分明に定示するを得ず要するに社會の進化は其初め有機物の進化と異なる所殆ど無しと云へども漸くにして之と異なるなり假に社會の現象は數多の生物相依り相待て爲す舉動なりと云ふべし

此定義に依れば社會と云ふ物は昆虫すら尙ほ組織する所なり蜜蜂は群居して巢を爲す者なり女王蜂一疋あり獨り兒を産み群蜂は兒を産むを得ざるか故に分業して共に之を養ふと毫も人類社會に異ならず白蟻亦能く分業して勞役す雌雄の別ある上に争鬪を專にする者雜業を專にする者の別あり又雄蟻にして翼ある者翼なき者あり雌蟻にも有翼無翼の二種あり依て白蟻社會は六種の蟻より成り事業少くも六種に分るゝなりサウバ蟻と云ふ蟻種あり此蟻種には雌雄兩種の蟻の外に明に雌雄の性質を示さざる者三種あり其一種は巢内に在りて勞働し他二種は巢外に在りて勞役す斯の如き分業の蟻種中に存する上に一種の群蟻にして他種の群蟻を捕へて奴として之を苦役し又は他の昆虫を捉へ之を巢内に蓄ふと猶ほ人の六畜を蓄ふか如きとあり

斯くの如く蜂蟻等の虫類は種々様々の社會を組成すと云へども此等の社會は眞正の社會と云ふを得ず唯有機物と出機物即ち社會との中間に位する物と云ふべし何と云ふに此等虫類社會は其實各一大家族を爲すより外ならずして決して

數多の家族より成れる團結を備ふるに非ず全く一母より出たる者の群居して巢を爲す而已にして祖先を同じくするも父母を異にする者の相集り居るに非ず鳥類亦一種の社會を爲す群鳥食を貪る際其二三頭は必ず四方を顧みて非常を戒むるなり獸に至りては社會の有様甚た複雑する者あり群獸中に於て最も猛烈なる者其群を率ある傾向あるは一種の政體を有するが如し人間にして社會を組織するや其本源昆虫禽獸の社會に均し然るに社會學者の研究する所は單に最高等の社會即ち人間社會なり

社會學の元祖は佛國の碩學アウグスト、コント氏なり氏は千七百九十八年即ち同國大革命以後十年目に生れ千八百五十七年に死せり氏の以前に社會學の原理定則とも云ふべき事柄を思按せし者ありと云へども皆能く一派の學問を組立つるを得さりき大革命以前に既にモンテスキウ氏、コンドール、セツト氏の如きは大に社會の組織上に係はる議論を唱へり氏と同時にして氏の由て大に自から化せられし所はサイモン氏なりサイモン氏は甚たしく當時の社會組織を惡み之を改良せんと計りしなり元來社會學の佛國に起り他國に成らざりしは必然の原因あり必

然の原因とは社會組織改良論の佛國に盛に行はれたることにして社會組織改良論の佛國に盛に行はれたるは大革命以前に佛國の社會組織紛亂して貧富貴賤の懸隔甚たしく國內田地三分二は僧侶貴族の有にして租を免せられたるに其三分一は衆民の有にして政府一切の費用を負擔したるなり社會の現象にして發生するに一定不變の順序規律に由來せるを認證するとは是れ社會學の原理を發顯するとなり社會の現象萬端なるに其一部分に就ては統計學の如き者既に之を研究せり而して人事社交の性質たるや其外面より見れば無常不定なるか如きは全く人事社交の甚たしく錯雜重複して學者の容易に之を概括要論して一定不變の原理に歸收するを得ざるか故なりと説きし者亦コント氏以前に輩出せり然るに同氏以前の學者人事社交に一定不變の原理あらんと思ひしも能く之を發顯すると無し同氏は人事社交の原理を發顯して社會學を開立し之が位置を諸専門學の内に置かんとを計れり

抑も社會組織の紛亂して改良更始を要したる事又斯る改良更始を計る仁人君子ありたる事今代に限れるに非ず太古既に之あり印度に於ては婆羅門の教人智

(六)
 を凋弊し貴賤定分の制萬民を奴隸にせしかは釋迦世尊の衆生濟度を要せり支那の周末に孔孟老莊の聖賢輩出せしも亦社會組織の紛亂を解き定めんとし給ひしなり斯る事古代希臘の季世にも觀る所なりプラトーンと云へる哲學者は當時民權政治の其弊を極めしを惡みて衆民の政權を收めて之を聖賢數人の手に歸し一人一個の私産を沒籍して之を社會全體の公産と爲さんと欲せり此說近來に至り社會論共產論虛無論など云へる論說の祖述する所なり又羅馬人の天下を一統し屬國人民の膏血を浚り以て己れの飲食に供へしかは耶蘇世主は天下萬民の爲め一視同仁の教を立てられたり

斯く社會の改良更始は古より有りふれたる事なるが之を説くに當り萬民の智に訴ふるより其情に訴ふると多かりき何と云ふに萬民は情に由て動き易く智に由て動き難かりしか故なり人の力を極め精を盡して求めんとする所あらは其目的の何たるかを分明に豫定するを必要なりとす何と云ふに目前に確乎たる目的あるに非されは力を極め精を盡して之を求むるを人に望むも誠に益なきなり又此目的たるや其性質は構造的にして新に事物を生出するものなる可く決して破壊的にして舊來の事物を消滅する者なるへからず目的にして性質破壊的なる時は人の之を求めんとする事あるも其之を求むると熱心より出てされは暫くにして中止すへきなり破壊的の目的にして能く人に慕はるゝ事あらんには其性質中に開進の種子を含蓄する事多くして現世をして高等の位置に進めんとする精神を有する事深からざるを得ず然るに宗教の如き者道德の如き者皆現世の位置を進めんとせしも一として其功を奏せし者古來未だ嘗て有りし事なし宗教道德既に然り他皆云ふに及はす人は自から高等の位置に進むを望む情感を備へたれば開進主義にして能く此情感を激昂する時は必ず人の之を信仰するや厚かるへし又人の事を爲すや其本意は情に動かさるゝも智に動かされざる事明なり古今治亂の跡を見るに大事變とも云ふへき者は皆堅固不拔の情感に由來したり其しや之に由來せざるも之に幫助せられたり而して俊傑英雄の人にして其行爲を以て甚たしく社會の性質風儀を變更せしは皆激烈の情感を備へたりしか故なり純粹の智識にして直接に人の心を動かすを得たる事古來未だ嘗て其例證を見ず凡そ古代に於ては衆民の能く身命を抛て大業に従事せしは皆情感の爲めに誘導せら

(七)
 壞的にして舊來の事物を消滅する者なるへからず目的にして性質破壊的なる時は人の之を求めんとする事あるも其之を求むると熱心より出てされは暫くにして中止すへきなり破壊的の目的にして能く人に慕はるゝ事あらんには其性質中に開進の種子を含蓄する事多くして現世をして高等の位置に進めんとする精神を有する事深からざるを得ず然るに宗教の如き者道德の如き者皆現世の位置を進めんとせしも一として其功を奏せし者古來未だ嘗て有りし事なし宗教道德既に然り他皆云ふに及はす人は自から高等の位置に進むを望む情感を備へたれば開進主義にして能く此情感を激昂する時は必ず人の之を信仰するや厚かるへし又人の事を爲すや其本意は情に動かさるゝも智に動かされざる事明なり古今治亂の跡を見るに大事變とも云ふへき者は皆堅固不拔の情感に由來したり其しや之に由來せざるも之に幫助せられたり而して俊傑英雄の人にして其行爲を以て甚たしく社會の性質風儀を變更せしは皆激烈の情感を備へたりしか故なり純粹の智識にして直接に人の心を動かすを得たる事古來未だ嘗て其例證を見ず凡そ古代に於ては衆民の能く身命を抛て大業に従事せしは皆情感の爲めに誘導せら

れしが故なり決して其業の道理に適合するや否やを明知せしに由來せしには非ざるなり近く例を取らんに明治の維新は實に大業なりしが此大業の成々し所以を究むるに諸侯は勤王の情感に引かれ衆庶は錦旗の光輝に眩せられしが故に能く斯る大業を成ししを知るなり諸侯は謂ゆる御殿様にして明治の今日には愚者の異名となれり諸侯なる者何ぞ明治維新以後に愚暗にして其以前に聰明なりしと云ふを得んや又民心の深く道理に動かされたる事は(無論直接に動かされし事)史籍上に例證ある事ならず依て知るべし人の作爲にして能く人の心を動かす者は宗教の如く人の情に訴ふる者なるを

凡そ宗教は萬般の情感を合體統一し情感の備へ得る全體の勢力を合一利用する者なり宗教改良者の嘗て大業を成就したる所以は全く其情感の強くして不敵難制なる事にあり決して其知識の深遠なる事には非す不思議にも世人の感動激昂せらるゝは情に由りて智に由らざる而已ならず且又眞の世主とも云はるべき人は眞の世主にならん爲め單に熱心家妄信者となる而已ならず多くは正氣本心を失ひたる人に成りたる事常なり古來自稱して神通を得たり幻術に達したりと

云へる者皆通常の人に爲し得へからざる事業を爲し得たるは勿論正氣本心の沙汰にては如何に高材明識の人にも爲し得へからざる事業を爲し得たり去れば苟も一宗教の開祖とも云はるゝ人は皆腦隨神經の組織に於て紛亂せる所ありと云はざるを得ず要するに狂氣亂心の人なり凡そ一宗を弘め一教を施くには尋常一様の盡力にて不可なるは勿論愚俗の耳目に神靈と見聞せらるゝ所業に由らされは不可なり又の身に加はるも火の躰を焼くも自若として動くも無く其神威靈姿は以て刃を執る者火を放つ者をして目眩し手振り進退自由ならさらしむるを要するなり如何に高材明識の人と云へども正氣本心にては刃の身に加はり火の躰を焼くに及びては自若泰然と構ふるを得ず斯る道理は當時醫家社會に於ても一決して疑はざる所となれり

斯く世の風潮の激動さるゝは智識道理に由らすして瘋顛狂人の亂心に由るは誠に驚き訝るに足ると雖も事實に於て明確にして疑ふへからず尤も此事は論理學に由て研究すべきに非す全く生理學に由て研究を爲すべきなり世の學者或は早晚今日の世態を顛倒するを得る機會到來せんと想ふ者あり或は智識道理は社

會の先導となりて凡俗の情感をして社會を動搖せしめざる時機到らんと思ふ者あり斯の如き空想を懐ける人は其生中は無論死後に於ても其願望をして成就せしむるを得ず智識は一種の力なれども其作用は事の方角を示すに止りて事を人に強ふる事なし之れに反して情感は事の善惡を問はず之を社會に強ふるなり凡そ議論説諭又は哲學者に取て便利の手段に由て生せらるべき社會の改良は智識上よりは寧ろ道德の上にて民心に浸染するを主とせざるを得ず斯の如く改良を仕遂くるには必ず古今の例に由らざるを得ずメヌウ(menu)ソロスター(zoroaster)孔孟釋迦耶蘇等の立てし宗教道德の先轍を踏まざるを得ず又此れ等の道德宗教の如く社會の實情に適合するにあらずんば之れに影響を加ふる能はず尤も孔子耶蘇の道德宗教と雖も今日其儘に之れを社會に應用せんとする時は必ず其功を奏する能はず何と云ふに宗教なり道德なり民心を動かさんとするには民智に相應したる道理を含みて時勢に逆らばざるを要す比點に於てのみ智識も又情感に等しく社會の改良に必要なを知るべし凡そ改良の成就するや民先づ之を信し而して後に民之を求むるに熱心すべし

第二章 社會現象の部類

凡そ物の作用は其固有せる性質と其所在境遇の性質との相合て成るなり金銀の固躰となるも流動躰となるも一部分は其固有の性質に由り一部分は其所在境遇の寒暖に由る煉瓦を積める車を覆へさば煉瓦は地上に堆をなす事高し砂石を積める車を覆へさば砂石地上に堆をなす事高からずして四方に廣がる打毬を盛れる箆を倒になせば打毬四方に散じて一所に有る事なし是れ外面より見れば全く煉瓦等の性質に由るが如しと云へども其實幾分の地質に由らざるを得ず煉瓦打毬も沼澤中に落れば同じく一所に在る可し斯く物の團結にして外境の變動に應ずる模様は相異なるは一は其團結を組成する物の性質に由り一は外境の性質即ち引力摩擦抵抗等に由る團結の生物より成る時其變動亦同一の理に由る者なり禽獸の一種族にして其頭數を増減し其居所の範圍を伸縮し永く一所に止まるも暫にして他に移るも其原因に二種あり一は禽獸固有の性質今一は禽獸の接する境遇の性質なり此理又人間社會にあり

凡そ人間社會に顯はるる現象を分ちて二種とす一は人間固有の性質に由て生

する者今一は人間所在の境遇に由て生ずる者はなり

境遇に由て生ずる現象は次の如し

(一) 天然の原因に由れる者

(イ) 氣候の寒暖乾濕

(ロ) 土地の肥瘠

(ハ) 山川の多少

(ニ) 植物ノ多少並に其種類の多少

(ホ) 動物の多少並に其種類の多少

(二) 人爲の原因に由れる者

(イ) 疏水開墾に由て地味氣候を變ずる事

(ロ) 植物の數を増し並に其性質を改むる事

(ハ) 動物の數を増し並に其性質を改むる事

人間固有の性質に由て生ずる現象次の如し

(一) 天然の原因に由れる者

(イ) 人は生れながらにして特別の体格を備へ由て社會の發達に影響を及ぼす事

(ロ) 人は生れながらにして特別の情感を有して社會の活動に影響を及ぼす事

(ハ) 人は生れながらにして特別の知識を備へ社會の利害得失に影響を及ぼす事

(二) 人爲の原因に由れる者

(イ) 社會の人數を増減する事

(ロ) 分業に由て事を計る事

(ハ) 社會全體と其一箇人との關係

(ニ) 一社會と他諸社會との間の關係

(ホ) 機械言語學術等

社會上の現象にして其境遇に由りて起るも尙ほ其原因の天然なる者は容易に

今日の社會に於て之を見るを得ず何と云ふに今日の社會は其境遇より影響を受

くる事多しと雖ども其境遇は人爲に由りて性質を變じたる事多し人は海中に堤

を築き堤内の水を浚へ新地を以て其居に供す和蘭人はなり沼澤を埋め原野とな

し之れに都會を開く者あり此東京の始め江戸城となりしは其一例なり山川又人

爲に由り其起伏流域を變ず草木禽獸亦然り概して云はゞ境遇の模様天然に由て成るに非ずして人爲に由て成れる者と云ふ可し境遇の模様にして専ら天然に由れる者は數万年の古に遡るに非ずんば見るを得可からず而して數万年前の事は容易に論ずるを得可からず世人或は數万年前には人類無しと云はん世人の斯く思ふは耶蘇經典等に載せる人類創始論に拘泥するが故なり地質學者の實驗に由るに書契以前世に種を斷ちたる獸類の遺骨と共に蠻屬人の用ゐし器具の地中より出る事あり是れ數万年前既に世に群民の相合て團結を爲し、證なり斯の如き太古の群民は其所在の境遇を利用するを知らず全く之れが爲めに制せられたる者なる可し

地層氣象の變化并に之れに由て生ずる草木禽獸の變化は太古の人民をして其居を移して止む事無からしめざるを得ず地層の變化とは近く例を取れば磐梯山噴火の爲めに山崩れ川生じたるが如き是なり地質學者の説く所の例を擧ぐれば大陸にして海中に沈み纔に山頂を海面に存し山頂海面に顯はれ數多くして相接す其海面を名付て多島海と云ふ氣象とは颶雨寒暑を云ふ風雨寒暑の變ずれば禽

獸草木の其種を斷ち其質を變ずる事あり禽獸草木の其種を ち其質を變ずるは野蠻人種の其居を一所に定むるを得ざる所以なり

凡そ人命に適したる土地は纔に温帶地方に限れり人にして衣食を求むるに忙しくして他事を顧るを得ざる時は能く其性質を改め其知識を進むるを得ず北亞米利加の北部に住める蠻屬をエスクモウ人種と云ふエスクモウ人種は其精根を盡して體温を全ふし并に體温を全ふせんが爲め飲食を求むるを妨ぐ故に飲食を求むるに忙はしエスクモウ人種は雪を穿ちて其内に住む雪屋には薪を燃し炭を焚くを得ず纔に燈火を點ずるを得可し故に體温を保たんが爲め鯨の脂油を飲食する事甚だ多し鯨の脂油にして人體の温度を高むるを得るは其炭素を含む事多く炭素は酸素と合て熱を生ずる者なるが故なりエスクモウ人は鯨の脂油を飲食する事多しと雖も其脂油は身體の滋養となる事少く専ら體温を保つにあり故に如此土地に於ては一人一個の身體を健全にするを得ず子孫の數を増すを得ず種屬全體の進化を計るを得ず

熱帶地方も亦人類の進化に便ならず尤も熱帶地方の不便は寒帶地方の不便に

比すれば小なり晝間暫く苦熱に耐へずと雖も且暮夜中は涼しくして労働に耐ふへし又熱帯地方には禽獸草木繁殖するを得故に古代に人の始めて國を成したるは熱帯地方に在り然れ共斯の如き國大に開化するを得ず耕作容易にして食物多く食物多くして人口繁殖す人にして食物を得ること容易なる時は其知を磨く事なし人口繁殖する時は一人一個の品位自ら下る者なり是れ國に君たる者容易に民を使役し民たる者は務めて己の意を抑へ専ら君の命に趨くが故なり猶文明國に於て職工の人數僱銀全額に比して多きに過る時金主は至少の賃金を以て職工を使ふを得べく職工は其職を失はんを恐れ賃銀の高下を問はざるより金主増々富み職工増々貧なるが如し故に熱帯地方に國の興るあるも文明の成る事無し文明の成るは獨り温帯地方の事なり温帯地方に於ては人自ら營むに非れば衣食を得る能はず裸躰にして露宿するを得ず五穀自然に熟するを得ず依て天然の貧苦を救ふは人自から勞して衣食を給するにあり人にして天然の貧苦を免かれんとして自ら勞作する時は自ら其知の進むべきなり温帯地方中に於て天然の貧苦多きは寒國の事其少きは暖國の事なり故に寒國の人知識増々進みて開化の度高し暖國の人知識淺くして開化の度卑くし歐羅巴に於ては開化の實多く人民の權多きは北方諸國の事開化の名ありて人民の權無きは南方諸國の事なり

第二章 野蠻人の躰格

人間の性質を分ちて二種とす一は太古野蠻の時より既に人間の備へし性質今一は人間の開化して始めて備ふる性質是なり太古野蠻の時より既に人間の備へし性質を假に名付て人間天賦の性質とす又開化人の性質を人間自作の性質とす太古野蠻人の性質は今之を研究するを得ざれば現今野蠻人の性質を以て之が代表とし之を研究す可きなり現今野蠻人の性質を分ちて三種とす一に躰格二に情感三に智識是なり本節に於ては躰格を論ずべし凡そ人野蠻なる時は其身軀短小なり其理由は寒暑の爲めに身軀の成長せざるが故なるべし又飲食時ならずして饑餓を忍ぶ事多く且之を忍ぶ間の長きが故なる可し南亞米理加州に「ギヤナ」印土人「アラック」人種「グラニス」人種と云ふ人種あり「ギヤナ」印土人は其丈五フット五インチ以上なる少し「アラック」人種は大概五フット四インチ以下なり「グラニス」人種にして五フットの丈あるは甚だ稀なり亞細亞北

部の人種皆短少なり亞細亞南部にヒル人種と云ふ者あり男は五ヒート二インチ
 女ハ四ヒート四インチなるが常なり又レフチヤス人種と云ふ者あり凡そ皆五ヒ
 ートなり又ジャンク人種と云ふ者あり男は五ヒート以下にして女は四ヒート八イ
 ンチなるを以て常とす亞非理加中部にアッカ人種と云ふ者あり男の丈大なるは四
 ヒート十インチ小なるは四ヒート六インチなり女は尙ほ一層小なりと云ふ

次に野蠻人の体格に著しきは兩脚の發達不充分なる事なり亞細亞北部の野蠻
 人オスチャク人種は脚瘦せて短し印土のヒル人種は腕長くして脚短し亞米理加の
 チノーク人種は脚短くして曲る亞非理加のアッカ人種は脚短くして曲れる而已な
 らず毎歩に傾倒する傾向あり其脚の發達不充分なる事推して知る可し脚の曲り
 て短きは木に棲み木に攀ぢるには便利なる可し然れども脚の曲りて短きは活潑
 迅速に歩行し難きは勿論接戦して力を角するに不便なり接戦の際に力は膝と腕
 とより出るも膝と腕とを支ふる者は脚なり力を出す事多き時は膝と腕との強大
 なるを要するなる而已ならず又脚の強大にして直立するを要するなり然れば長
 脚人種短脚人種相争ひて雌雄を決する時は長脚人種の勝ちて短脚人種の敗ぶる
 るは必然の勢なり

次に野蠻人種の体格に著しきは腮と齒との非常に大なる事是なり野蠻人は銳
 利の道具を作るを知らず故に物を切り物を碎き特に粗草固硬の食物を咬み碎く
 には必ず齒を用ゐるなり齒に由て大力を出すには強大の腮を要するなり腮は齒
 を支ふる者なれば齒の強大なるに隨て強大ならざる可からず人の開化して利器
 を發明し之を用ゐる事多きに隨ひて腮と齒とを用ゐる事少く腮と齒とを用ゐる
 事少きに隨ひて腮と齒との小弱になるなり是れ人種の局部は使用多きに隨ひて
 發達し使用少きに隨ひて衰萎する原理に基くなり

次に著しきは腸胃の大にして腹部の膨脹せる事是なりカムシヤテールと云ふ蠻
 屬あり其腹部大にして大囊を垂るゝが如しと云ふアッカ人種ブッシュ人種の如きは
 皆腹部の突出せる事非常なりとぞ又蠻屬に胸の上部は平にして小狹なるに其下
 部は漸く廣がり大腹に接して兩脇並に前部に膨脹する者あり蠻屬は扱置きて開
 化人種の小兒を見るに其腹部は其体格に比して大なり小兒は身軀發達の急なる
 者にして此急速の身軀發達は食物を要する事大なり食する事多きは腹部の大な

るを要し又腹部の自から大になるなり小兒は大人に比するに飲食時ならずして節なし野蠻人亦然かり食すべき物ある時に飽く迄之を食し食すべき物なき時は能く饑餓を忍び又野蠻人の不幸なるは其の食する物多くは菓實蔬菜の類にして滋養分の少き者なり又野蠻人は肉食をするも其物は牛羊豚の良品に非ずして虫類の滋養分多からざる者なり故に此の如き滋養分に乏しき物を食する時は多量に之を食するに非ざれば能く軀を養ふ事なし又斯く多量に物を食する時は自然腹部の大なるを要するなり

次に野蠻人の開化人に異なるは其の俄に大力を出すを得ざる事並に長く大力を出すを得ざる事是なり是れ飲食の粗草無常なると神經發育の不充分なるとに由來するなり大力を出すに筋肉の充分に發達したる事の緊要なるは勿論神經の充分に發達したる事必用なり情感薄く懸望淺き時は筋肉の力大ならざるに狂氣亂心したる時は力の發する事非常にして正氣の時の比に非ざるを以て神經と力量との關係を知るを得べし然れば野蠻人は腦髓小にして情感薄ければ其力量の少きも自然の勢なり

次に著きは野蠻人は開化人に比すれば身軀の強健なる事是なり特に野蠻の女子は分娩に由りて身軀を傷損する事殆ど無きに開化國の女子は分娩の爲めに生命をも失ふ事おほきを見れば彼此の体格に大なる相違あるを知る可しマレー多島海中にフニゴス島と云ふ島あり此島の人能く寒を忍ぶ雨雪の降りて其裸軀上に解くるも自若として意とせず亞細亞北部にヤツツ人種と云ふ者あり能く寒を忍ぶより鐵質人種と云ふ名を得たり印度の蠻屬に瘴癘熱病おほき土地に住みて左程の害を受けざる者ありオーストレリヤ州の蠻屬には開化人にして負ひたらば必ず死すべき程の重傷を負へるも暫にして容易に癒ゆる者あり

次に著しきは野蠻人の感覺鈍にして苦痛も愉快も之を感ずる事甚だ薄しズル人種は苦痛を知らぬ者と云ふ可し足を以て燃ゆる薪を排列し手を以て熱湯中の物を探るを得と云ふ日本にも上古は罪の有無を判する爲め熱湯を探る事あり熱湯を探りて焼傷なき時は無罪となり焼傷ある時は有罪となる制なり能く此制の行はれしは上古日本人の感覺鈍なりしが故なるべし今日の人罪あるも罪なきも熱湯中に手を入るれば傷を負ふ可きなり

次に記すべきは野蠻人は開化人に比すれば身軀の發達早き事是なり野蠻人の見にして人に成るは早く開化人の見にして人に成るは晚し開化人は腦髓大にして發達容易ならず故に腦髓の發達に伴ふ身軀の發達は漸々にして晚成なり野蠻人は然からず腦髓小にして早く成り隨ひて身軀亦早く成るなり身軀發達の上に於て開化人と野蠻人との相違は猶ほ女子と男子との相違の如し

第四章 野蠻人の情感

第一に野蠻人の情感に著しきは喜怒哀の常なくして烈しき事是なりクリーク人は性質小兒の如くにて石に跌踣すれば大に怒り其上を躍び之を取りて咬む事恰も犬の狂ふが如し亞拉比亞人の日常交誼は恰も争鬪諍譁の如し錢一文の爲め半日の間相争ふ事往々なりブッシュマン人種は相争ふ事常にして父子相殺すも例の少きに非ずアンダマン人種の如きは涙を流すかと思へば間も無く微笑し又微笑するかと思へば間も無く涙を流し其情の變轉する事少しも豫定す可からず

次に著しきは野蠻人の前見の力に乏しく豫備の意に淺き事是なり俗に云ふ要害の無き事なりオーストロリア洲の蠻屬目前に結果を生ずるに非ざれば身軀を勞する事無しブッシュマン人種は懶惰にして少しも要害を爲さず故に其活計は常に饑餓に非ざれば饑饉なり

野蠻人は先見豫備を爲さず食す可き物あれば之れを食ひ食すべき物なき時は飢う少しも食物を蓄はへて後日に備ふる事なし故に財産の思想無し凡そ財産の思想起るは人にして牛羊を飼ひ牛羊の繁殖に由りて利益を得る後の事なり然るに人にして牧畜を以て生計を立つる時は大なる財産を有する能はず何と云ふに牛羊繁息して其數大なる時は之れに食物を與ふる事容易ならず又敵に奪掠を蒙り野獸に損害を受くる事大なる可し人にして農業を以て生計を立るに至り大に財産を有するを得可し

次に著るしきは野蠻人の他人に制御せらるゝを嫌ふ事是なり凡社會を組織するには人々幾分か其意を曲げて他人の意に従がざるを得ず然るに野蠻人は人に従ふを嫌ふが故に大なる團結を爲す能はず「マレ」半島の土人「マントラ」人種は自恣自由を以て生命の養液とし身を愛し他を顧り見ざる事恰も地球上には我身

一身の外に一人も人の無きが如し若し二人にして相争ふ時は直ちに相分るを常とす。ボルネオ島の土人は相養ひ相生する事無く小兒と雖ども父母の手に由らずして自から飲食を求むるを得べき年齢に至れば父母の許を去り永く父母を忘る次に著るしきは野蠻人の名譽虚飾を好む事是なり野蠻人にして名譽虚飾を好むに至るは既に人々相養ひ相生して幾分の團結を爲したる後の事なり蠻屬の酋長の其心を身軀の虚飾に止むるは開化國の婦人も遠く及ばざる所なり野蠻人にして未だ身に纏ふに衣服を用ゐるを知らざる時皮膚を繪がきて飾りと爲すを以ても其虚飾を好むの甚だしきを知る可し又苦痛不便を忍び身軀に入れ墨をして飾を爲し唇を穿ちて穴を爲し之れに入るゝに棒を以てし頬鼻を穿ちて石を挿むの習慣あり斯の如き習慣は其苦痛不便の大なるに拘はらず其土地の者皆守らざるを得ず若し少年にして斯の如き虚飾を爲す年齢に達し苦痛不便を恐れて之れを爲さざらんとする時は必ず其の社會一般の誹りを受く可きなり少年は其の社會一般の譽を得んとして能く苦痛不便を忍び斯の如き虚飾を爲さざるを得ず野蠻社會に於て復讐の行なはるゝは其の一種の名譽と爲ればなり子にして父の仇

を報ずる時は其の人に譽めらるゝ事多し又殉死も一種の名譽となる者なり指を断ち身を傷つけ之を死人の供養にするも亦一種の名譽なり甚だしきに至つては兒を殺して神に供するを以て名譽とす

次に記す可き事は野蠻人の情愛と暴逆とを合せ有する事是なり凡そ親にして子を愛するは禽獸にもある事なれば野蠻社會にもあるべきは論を俟たざるなり然るに野蠻人は其兒を愛する事開化人の如く慈悲深きに非ず。ヒュース島の一人其の兒を愛する事厚しと雖ども之れを賣りて奴となすを憚からず。チーストレイヤ洲の一蠻屬は兒を愛する事非常なれども兒にして病む時は之を棄つ又魚を釣る爲め童子を殺し其脂を取り之れを釣針に刺す。タスマニヤ人種は母にして子を産みし後病死せば母の死骸とともに小兒を活埋めにする事あり。ヒュース島の人平常は人々相親しめども食物の乏しき時老女を殺して其肉を食ふ。凡そ野蠻社會に於て女子は男子に逆遇苦役せらるゝを以て女子の本分とするは男子の認る所のみならず女子も自ら許す所なり

次に記す可き事は野蠻人の性質偏固にして改良し難き事是なり此の事は前節

の末に述べし野蠻人の身體の發育早き事に關係する事大なり開化國に於ても俗人は智者に比すれば性質偏固にして事物の日新を嫌ふ者なれど此の氣質野蠻人に甚だ多し故に野蠻人は衣食住の改良を爲し其身の品位を高むる事容易ならず

第五章 野蠻人の智識

第一に野蠻人は事物を識別する感覺甚だ鋭きを以て著しブッシュマン人種は物を見る事甚だ鋭く其眼力望遠鏡の如し亞米利加土人は善く遠方の物并に響を察するを得又野蠻人は手工に巧みなる者なり野蠻人の弓を射石を投くるに巧みなるは此の所以なり

次に記す可き事は野蠻人の巧に他人の眞似を爲す事なり開化國に於ても俗人は自から新たに事を爲す事少く世の風潮に従ふ事多し世の風潮に従ふは世人一般の爲す所を眞似するのみに止まるカムヤテール人種は善く人の眞似禽獸の眞似を爲すヒュッス島の人は眞似を爲すに巧にして人の語りし所を一言半句も違がへずして之れを眞似するを得と云ふ

野蠻人は妄信を爲す者なり妄りに信ずるは物理に暗き故なり又野蠻人は物理

上不審す可き事を不審する事なし是れ亦其の物理に暗きが故なり野蠻人は事物を不審する事無ければ事物の新發明を爲す事なし

野蠻人の智識の發達するや疾くして其成るや早し此の事は前の兩節の末に述べたる事と相伴ふなり野蠻人の小兒は開化人の小兒に比すれば事物を曉る事早し此れ野蠻人の小兒は智識の發達早き證據なり然るに野蠻人の小兒成長したる時は開化人の容易に曉る所を容易に曉る能はず此れ野蠻人の識量少なき證據なり

第六章 野蠻人の思想

社會の現象を説くに外界の景况並に野蠻人の体格情感智識のみに由れば尙ほ足らざる所あり即ち野蠻人にして我身並に外界の何物なるかを想像する事を用ても社會の現象を説かざる可からず野蠻人にして我身並に外界に對して懐ける想像は其所爲に影響を及ぼす事大なり

今假に野蠻人が外界の現象を見て如何なる想像を起すかを二三の例を以て示さん大空を眺むれば開晴なり瞬間にして一群の雲出て來りて眺むる間に天に漲

る暫くにして雲散じて天再び晴る野蠻人雲の集散を見て如何なる思想を起す可
 きか野蠻人は未だ蒸氣の凝結して雲となり雲の散じて復蒸氣となるを知らず又
 人有りて是れ雲なりと彼に語る事なし彼の考ふる所は前に見ざりし物の現はれ
 出る事並に今迄現はれ居し物の俄に消失せたる事はなり此の怪物の何所より現
 はれ出で何所に消失せ何故に出没するかを曉る能はず而して彼の怪疑此に止ま
 らず太陽西に傾きて見めく者東に現はれ天暗くなるに従て見めく者益々見めき
 其數も増す夜明るに至つて此見めく者次第に消え失せ終に一も止まる事無し此
 見めく者の何所より來りて何所に往き何故に現はれては消え消ては現はると彼
 の野蠻人は疑ふ可し弱き光りけ~~ん~~き光りに暗まされ星は夜間に限らず晝間も亦
 輝き居るは其思想の遠く及はざる所なり故に彼は此怪物を以て出現消失を自在
 にする者と思ふなる可し

太陽は東の海より出て、西の山に没す月は初め細小にして次第に膨脹して遂
 に圓滿の形を爲す然るに圓滿して後次第に縮少して遂に其跡を絶つ日月の外
 に出沒常なき者は流星彗星等なり電光虹霓亦出沒常なき者なり

地上地中亦出沒常なき者に富めり大河に水涸るゝ時あり水溢るゝ時あり水の
 溢るゝは雨の俄かに降るに由る水の涸るゝは旱魃に依る霧は集ると思へば俄か
 に散ずる者なり殊に不思議なるは蜃氣樓是なり風も亦俄かに起つて俄かに止む
 者なり地中より化石出づ蛤の形を爲す者あり木葉の形を爲す者あり禽獸の形を
 爲す者あり

是に於てや野蠻人は日月等の出沒を見て其の獵する猪鹿の野に出づるも之を
 追へば森に隠るゝに異ならず則ち日月等には隠顯二種の體ありと思ふなり又化
 石は禽獸草木の形を變じたる者と思ふなり

物の能く其形體を變じ其性質を變ずるを野蠻人に信ぜしむる理由他に亦多し
 第一に大木は皆二葉より成り其二葉亦種子より成る第二に鳥は皆卵より成る蠶
 は初め卵より出る時黑色の小虫なり後ち長大して白色になり繭を作り自ら其中
 に藏る最後に繭を脱して出づる時蝶となる其變化多くして驚くに足る

凡そ人水際に臨めば其面水中に寫り曠野に出で叫べば其聲樹木に中りて反る
 野蠻人は必ず如此影響を以て水中樹後にある人の形聲と思ふなるべし此事文明

國の小兒を以て證とすべし水中樹後にある人は即ち水に臨み野に叫ぶ人の靈なりと野蠻人並に小兒に思はるゝなり

第七章 死生の思想

凡そ有生物と無生物との相違は有生物の自から動くも無生物の他の力に依りて動くに在り然るに無生物と云へども野蠻人の淺知には自動を爲すと思わるる者ありエスキモー人種は初めて帆船を見し時之を以て有翼の鯨ならんと思へり野蠻人には磁石を見て有生物と思ひし者あり故に野蠻人は兎角に無生物を以て有生物と思ふなり

野蠻人は死を以て睡眠の一種となすなり故に死したる人を以て尙ほ有生の人となす何にと云ふに前節に云ひし如く野蠻人は物に隠顯二種の躰あり人にも亦隠顯二種の躰ありと思ふなり故に死したる人は顯躰存して隠躰去りたるなり隠躰去りたるも復た顯躰に歸りて之と合することありと思ふなり野蠻人の斯く思ふは種々の理由あり

第一に夢を以て實事とする事はなり野蠻人は夢を以て夢とする能はず夢を以

て實事となす所以は野蠻人の言語不完全なる事其發音不明瞭なる事にあり言語不完全なれば夢に見たる事と現に見たる事とを區別する能はず其發音不明瞭なるは亦夢と現とを混同する者なり夢と現とを混同し夢に見たる事を實事と思ふ故に野蠻人は其躰に二身ありと思ふなり何といふに睡眠中其躰は不動なると傍觀者之を證するのみならず睡眠したる本人も覺めて四方を見れば其地位睡眠以前に異ならざるを以て其躰の不動なるを知るべし然るに本人は睡眠中に見たる所多く又往く所遠し覺めて後見たる所往きたる所を他人に語るを得べし故に野蠻人は睡眠中に不動にして且つ動くを得と思ふなり則ち顯身不動にして隱身動くと信するなり

第二に物に隠顯二種の躰ありといふ思想を起す所以は氣絶癲癇中風等の一時正氣を失ふも暫くにして又正氣に復する病症是なり野蠻人は氣絶癲癇中風等を以て睡眠の一種とす是等の病症に罹りたる者は力を極めて其躰を動し聲を盡して其名を呼ばい正氣に復する事あり時として數日を経ざれば正氣に復せざる事あり此の如き時傍觀する者必ず病人の顯躰不動なるも其隱躰遠く漫行すと思ふ

なり

野蠻人け 以て睡眠氣絶癩痢中風等の種類にして正氣の一時消滅する有様とす死を以て 永く消滅する有様と思ふは是れ全く開化人の事にして野蠻人の事に非 死を以て正氣の一時消滅し時を経て回復するものと思ふが故 執成其正氣を回復するに力を盡し術を極むるなり死人の正

社

次に死人の心を慰むると是れなり是に於てや始めて死人に飲食を供し

學

徳を頌すると興るなり又死骸の腐敗する時は正氣の回復に不便なりと思ふが故に死骸に衣服を着くるは無論藥種を以て其腐敗を止るを計るに至る我國にも貴人社會に朱を死骸に詰る習慣あり其遠因或は此に説く所と同一ならん死したる者遂に其正氣に復せず然るに野蠻人は尙ほ死人の正氣復すへき者と思へば死人の供養を廢するとなし只時を定めて供養を爲す一日三度飲食を供ふる代りに毎日一度飲食を供し又毎日二度飲食を供し又毎日一度の代りに一周一度とす又一周一度の代りに毎月一度とす毎月一度の供養は一年一度の供養とな

社

り一年一度の供養は三年一度の供養となると云ふべし又死人の正氣遂に復せずと雖も野蠻人は死人の骸を棄つるとなし反つて之れを保存するに鄭重なり何といふに野獸來りて死人の肉を食ひ敵來りて死人の骨を竊みて之を毀ち死人の正氣をして恢復に不便ならしむるを恐るゝが故なり是に於てや死人を深山人跡なき所に埋め又は川の流を堰き川底を堀りて其中に死人を埋め而して水流を本來の如くにす因て禽獸及び敵をして死人のある所を知らざらしむ又人死すれば其近親の髪を剃り爪を斬るは野蠻社會の常習なるが是れ全く死人の心を慰め其蘇生の早きを欲するに基するなり

第八章 冥界の思想

野蠻人は靈魂を以て肉骸と等しく物質より成る者とす故に野蠻人中には開化人の漫遊に來れる者を見て其死したる親族の靈魂なりといふ事西洋人の漫遊記中に往々見る所なり野蠻人中人死すれば神に食はるゝと信ずる者あり今日の開化時代と雖も俗人中には惡魔來りて人家の戸を開き鎖を鳴らし人を懼らすといふ者あり斯くいふは幾分か惡魔も肉骸を備へたる者と思ふが故也野蠻人中に靈

學

會

魂と人影を同一視する者多し又心臟を以て靈魂とする者あり人死すれば心臟の脉動止む心臟の脉動止むは則ち靈魂の人軀を去るなりと野蠻人は思ふなり又野蠻人の靈魂と息氣いきとを同一にする者多し故に靈魂に附けたる名の義を研究するに息氣又は呼吸の義あり我國に於て命の字を訓ていのちといふ一説にいのちはいきの中を省略したるなりといふ

野蠻人は靈魂の種類を分ちて死したる人の靈魂睡りたる人の靈魂覺めたる人の靈魂とす又靈魂の種類を二つに分ち親友の靈魂仇讎の靈魂とす又靈魂を分ちて人間の靈魂禽獸の靈魂草木の靈魂不動物の靈魂とす

野蠻人は靈魂を以て不死不滅とせず反つて其生命に時限ありとす何といふに死人の夢に顯はるゝ間は死人尙ほ生命ありとす若し死人にして永く夢に其跡を絶つときは死人既に生命を失へりと思ふなり靈魂を以て不死不滅とするは人智大に開けし後の事なり野蠻人は冥界の有様を形容する事人間社會の有様を形容するに異ならず故に死人は睡眠する時あり醒覺する時あり醒覺する時は坐より起きて飲食を求むと云ふ又死人は人間社會に來るを得るは夜中に限り白晝は幽冥世界に蟄居せざるを得ずと云ふ又死人は生人の如く妻子眷屬を有し農業をなし戦争をなし漁獵をなし其生計萬事人間社會に異ならずと云ふ然るに幽冥世界の人間社會に異なるは幽冥世界の事物は人間社會の事物に比すれば遙かに大且多なる事是れなり飲食の物皆精良にして其量に際限なし魚多く獸多く漁獵に行て獲る所多し野蠻社會に於て人死する時其所有の武器獵器を其墓内に藏するは是れ全く死人の幽冥世界に於て戦争漁獵するに當り不便なからしめんと欲するが故なり又衣服珠玉金銀を墓中に藏するは死人をして是れを用ひしめんと欲するなり又人死する時其近親従者犬馬を殺して其殉死とするは死人をして是等を召使ふ事在世の時に等しからしめんとするなり此の如き習慣は遂に國俗となり宗教の一部と成る者なり

幽冥社會と人間社會との相類するは飲食衣服等に限らず其相類するは行爲情感并に是非曲直の標準にも及ぶなり凡そ人間社會に於て殺害を好めば幽冥世界に於ても之を好む人にして奸淫を恥とせざれば神亦是れを恥とせず斯く幽冥世界と人間社會との相續するは幽冥世界の思想は全く人間社會の思想に基するが

故なり

幽冥世界の人間社會を離るゝ遠近如何、人類の群を爲して社會を爲し未だ年所を經ると久しからざる時は死人皆其親族に人間社會の近傍にありと思はるゝなり然るに人類水草を追ひ居所を轉遷すると多くして遂に幽冥世界を以て遠く人間社會に離るゝとするに至る又其居所轉遷の方向により幽冥世界の方位定まるなり居所轉遷の際旅行し來れる土地の景況により人間社會より幽冥世界に至る途次の景況定まるなり野蠻人は或は幽冥世界は西方にあり大海を渡りて之れに達すべしと云ふ或は幽冥世界は東にありと云ふ或は日の出づる所を以て極樂とす或は天を以て極樂とす或は地中を以て死人の土地とす又北を以て極樂とし南を以て極樂とす極樂に達する途次又様々なり大陸を通りて是れに達すべく大河を渡りて是れに至るべし又大海を渡りて是れに行くべく山嶺を越えて是れに達すべし斯く幽冥世界に達する途次に相違あれば葬式必用の裝具に相違あり棺中に小船を備ふる習慣あり死人の懷中に六道錢を入るゝ事あり鉾鉞を棺中に備へ山林を跋渉するに便ならしむ犬馬をして平原を旅行する友とす

CHIC

凡そ一社會の二人種より成る時は其一に戦ひて勝ちたる者其一は戦ひて敗れたる者なる時は一社會に二種の幽冥世界生ずるなり然して勝者の幽冥世界は敗者の幽冥世界に比すれば遙かに優れり又優等人種にして死すれば之れを山谷に葬むる習慣より死人天にありと云ふ思想起る然して死人所在の天は初めは其方位明かなるも人智進むに従ひ益々不明になるなり

第九章 鬼神の思想

野蠻人は人死するに従ひて鬼神の數増加すと思ふなり死人は初め人家の近傍に徘徊すると思はるゝも後には遠く去り或は再び顯れ或は又顯はるゝ事なしと思はるゝなり此の如き死人即ち鬼神は人間の見るを得ざるも天地間に充滿して天地間の事變を引起すものと思はるゝなり雲の集散星の出没颶風雷鳴地震は皆此の如き鬼神の爲す所と思はるゝ又氣絶癲癇中風狂亂疾病死亡も亦鬼神の所爲と思はるゝ

野蠻人は鬼神を以て人跡に附憑するものとす故に巫術占考等を以て鬼神の所爲なりとす鬼神に二種あり仇讎死して鬼神となりたる者親友死して鬼神となり

CHIC

たる者は是れなり仇讎鬼神となりて惡を爲す故に是れを惡神とす親友鬼神となりて善を爲す是れを善神と云ふ巫靈は善神の加護を以て人跡に附憑したる惡神を驅除するを得べしと思はるゝなり

鬼神に供へたる靈場殿堂の縁起は遠く死人に供へたる墓所に基し其發達して宏大になりし者なり鬼神の爲めに供物を備へ斷食讀經等の苦行を爲すも亦死人の蘇生を願ひ其意を慰めんとして髪を削り爪を斬り其功德を頌せしに基す巡禮の如きも亦其遠因は妻子の其亡夫亡親の墓所に參詣せし事是れなり

第十章 宗教の思想

凡そ宗教の組織は祖先祭祀を以て最初の宗教とす尤も鬼神を念ずる心は人間固有の者なり祖先祭祀即ち祭祖教の外に偶像教奇物教禽獸教草木教萬物教神教あり神教に二種あり多神を奉する者一神を奉する者は是れなり是等諸般の宗教皆祭祖教より出でたりとす

(一) 祖先教

野蠻人の鬼神を信ずるや其祖先の靈を以て最も尊き鬼神とす野蠻人皆其祖先を以て造物主と同一視し日月星辰を初めとし天地間の萬物を造れりとす然るに怪むべき事は斯く自在大力の祖先を以て蘆の中より出たりと云ひ又は木の中より出たりと云ふと是れなり深く此研究を爲さば蘆の中より出たりと云ひ木の中より出たりと云ふは取も直さず一新地を開墾して荆棘を除き大澤の蘆を刈り山林の木を伐り以て平原に顯れ出たる事なるべし

(二) 偶像教並に奇物教

偶像教は死人の偶像を造りて是を拜するを云ふ偶像を造るには死人を焼き其髑髏に詰るに石灰を以てし髑髏の面部をして死人の面部に摸擬す或は死人を焼き其灰を練りて偶像を造る或は死人の遺骸を襖中に藏し襖上に死人に似たる偶像を置く事あり奇物教とは異常の形狀を有する物を以て靈ありとするとなり深山に入れば古木の狀人間に類するとあり海濱に至れば巖石の狀人間禽獸に類するあり斯の如き者は野蠻人には必ず鬼神の憑る所と思はるゝなり世の學者或は奇物教は鬼神の思想起らざる以前に生じたるものと云ふ是れ全く誤れるなり物の前後を知らざるなり先づ鬼神の思想ありて後に鬼神の奇物に憑ると云ふ思想

の起るなり

(四〇)

(三) 禽獸教

禽獸教は禽獸を拜する教なり其本元は先祖の祭祀なり先祖の祭祀變遷して禽獸となるに種々の原因あり第一に先祖は禽獸の形をなして人間社會に再來すと云ふ事第二に墓所並に暗黒の地に住める禽獸は死人の靈なりと云ふ事第三に祖先は禽獸の名を取りて己れの名としたる時其子孫の之を以て禽獸と思ふ事是れなり野蠻人は人は其形を變じて禽獸となるを得と思ふなり蓋し夢の中に變じて禽獸となり禽獸變じて人となる事あるより此の如き信仰を起す蜘蛛等の如く人家に住み人家に出づると多き動物は祖先の再來と野蠻人に思はるゝなり蝙蝠及び鳥は兎角墓地等の暗所に住む者なり故に死人の靈と思はるゝなり野蠻人多くは其武力を示さんとして虎狼等の名を以て己れが名とす後世に至り子孫誤りて祖先を以て禽獸とす世の學者或は禽獸教は祭祖教より劣り祭祖教の以前に生じたる者とす是れ誤れるなり祖先を畏敬するを知り祖先を以て禽獸と誤り從て禽獸を畏敬するに至るを進化の次第とす

(四) 植物教

植物教の起る所以に三種あり第一に鴉片烟艸又は其他の植物にして酒になる物の人心を醉亂するは鴉片烟艸等の性質靈妙にして鬼神の宿る處と信ずる事第二に野蠻人は其祖先の出でし地に生ぜる特種の艸木を以て其祖先の出處とする事第三に野蠻人は艸木の名を以て名としたる人物を其草木と同物視する事是れなり

野蠻人の靈草神木と視做すものはソーマ草、鴉片、烟草、ハチマ草、コカ草等なりソーマ草の事は波羅門經文なる韋陀經に詳なり韋陀經には此の草を以て神靈にして鬼神の其汁を吸て以て靈驗を致す所なりとす又人にして其汁を吸ひて酔ひたる時能く鬼神に遭遇するを得と同經に云へりハチマ草は古代波斯人の神靈と思ひし者にして其遺書に依れば其性質功驗印度のソーマ草に等しかりしを知る烟草は南米の白露人の靈草としたる所コカ草はチアチヤ人の神草とする所なり兎角野蠻人は蘆又は其類の草木又は山間の洞窟を以て萬物の本源祖先の出處とす亞非利加のコンゴ人は其祖先は樹より生じ其王族は森より出てたりと云ふ

(四一)

而して野蠻人は皆其祖先の出處と思へる草木を以て神靈として之を祭るなり

野蠻人は男女ともに名を定むる時之れを禽獸草木の名に取るなり此の事開化せる今日の日本にも存せり或は其行ひに依りて其名を定め或は其兄弟の次第に依りて其名を定むる事あれども禽獸草木の名を取て人の名とする事少なからず信長、秀吉、家康の如きは其行ひに名を取りたるもの太郎、次郎、三郎の如きは其兄弟の次第に依りて名を定めたるものなれども前田、犬千代、武田、信虎、大磯の虎、世間普通の松、竹、梅、花、蝶、鳥、鷹の如きは皆禽獸草木に名を取りたるものなり野蠻人中には日月、風、雨、麻、綿、烟草、蛇、蝎、豺、狼等の名を有するものあり野蠻人の祖先にして禽獸草木の名を有せし者其子孫に禽獸草木と思はれ其祭祀は禽獸草木の祭祀となる上に述べたる三箇條は植物教の起る所以なりと雖も植物教は祖先祭祀の一變したるものにして之れと本性を異にするものに非ず且つ又植物教は社會學の論點より之れを見る時は祖先祭祀に先き立ちて起りたるに非ず祖先祭祀より劣等なるに非ず祖先祭祀先づ起り漸く進化變遷して植物教となるなり

(五) 萬物教

日月、星辰、雷電、大山、大河等を祭ると亦祖先を祭るとの變遷したるなり日月、星辰等を祭ると之を萬物教といふ其起る所以は第一に人種初出の地に於て重要な物を以て人種の本源とすると第二に日月、星辰等と之れを以て名としたる人物とを混同すると是れなり山は人種の出來りし所ならん其出來りし所を以て人種の本源と見做すは野蠻人の常なり人種或は一所より一所に遷るに海を渡りしならん後に至り此人種海を以て其本源と見做すに至らん斯く海山を以て人類の本源と見做す時は之れを以て人類同質の者と見做すは必然の勢なり星辰を祭るは人死して天に昇り燎を燃し居ると云ふ想像より起れり北米の野蠻人には銀河を以て死人の旅行して松明を燃す所なりと云ふものあり野蠻人は日月を以て死人の行て住む所となすより遂に之を以て死人と同一にするに至る抑も日月を以て死人の行て住む所とするは凡そ人死すれば之れを山間の高處に葬るに靈魂は墓地に在らずして天に昇ると云ふ想像に基するなり

(六) 神教

神則ち人類同様の形體性質を備ふる靈物を祭るは是れ亦祖先の祭祀に基づけり

野蠻人は形體作用の異常なる者を恐れ避くると尙ほ禽獸に異ならず野蠻人は其小量の智識を以て會得せざる所を皆不思議なりとす其不思議とする所は其畏敬する所なり其の畏敬する所は其神明とする所なり開化人にして野蠻社會に至れば必ず神明と思はるゝなり是の事豈野蠻社會に限らんや不開化の人民にして開化の人民を欽慕し之れを奉ずると神明に均しきと今日吾人の此地に目撃する所なり

(四四)

凡そ人に神と思はるゝ者の種類性質は次の如し

- 一 野蠻社會に在りては人にして智識上德行上少しく他人に優れる者は皆其生存中に特に死後に神として仰ぎ尊まるゝなり
- 二 野蠻人の酋長は其生存中に特に死後に其屬人に神とせらるゝなり
- 三 微開の國に於ても國王は皆其臣民の神とする所なり
- 四 巫覡並に妖術占考に長ぜる者皆野蠻人の神とする所なり
- 五 工藝の元祖製造の發明者皆野蠻人の神とする所なり
- 六 優等人種の人一人にして劣等人種の社會に往く時は必らず神明と思はるゝなり

はるゝなり

- 七 優等人種にして劣等人種と戦て之れを従へる時優等人種全體は神明と思はるゝなり

思はるゝなり

耶蘇教は一神を奉ずれども他諸種の宗教と均しく祖先の祭祀より進化したるなり耶蘇教は猶太教の一變したる者なり猶太教は一神を奉ずる宗教と耶蘇教家は唱ふれども其實然らず猶太教の經文中に神と云てある者は人間同様の形體性質を備へ野蠻人種一般に神とする所と異ならず抑も猶太人は水草を追うて國を作す人民なりしかば學藝に長せず故に遍歴の際既に開化したる國民の君主に際會する時は之れを以て人間視せず之れを神明なりと思へり又經文中に用ゐたる語アドナイは君主と云ふ意あり猶太人の神をアドナイと云ふは其神とする所を以て有力の蠻酋又は大國の君主に等しと思へる證據と云ふべし又經文に「箇の神と云ふ句あり既に一箇の神と云ふ時は神數の多きを證するなり然るに猶太人にして多神を奉ぜざるは既に遍歴を事としたる故に一定の地に住む能はず既に一定の地に住む能はざるが故に祖先代々墓所を有する事なし既に祖先代々の墓

(四五)

(四六)
 所を有する事無きが故に祖先代々の精靈を祭る事無し既に祖先代々の精靈を祭
 る事なきが故に祖中の功德最も高く事業最も永く口碑に存せる者一人のみを祭
 らざるを得ず既に功德最も高く事業最も永く口碑に存する祖先一人を祭り以て
 神となすが故に遍歴の際に出逢ひたる有力の蠻酋等を以て神の化身即ち祖先精
 靈の再現と思ふなり又經文中に載せたる猶太人と其神との間に成りし誓約は今
 日の道德標準に照らして不仁無恩と云ふ可き事多し其不仁無恩の誓約は今日の
 野蠻社會中に例證多き有力の蠻酋と無力の遍歴者との間に成れる誓約に寸分違
 ふとなし故に猶太人の所謂神を以て眞神とする時は眞神は人間に對し不仁無恩
 にして人間の尊奉すべきものに非ず又今日の人眞神を以て仁愛恩恵に富めりと
 すれば眞神にして猶太經典中に載せたる不仁無恩の誓約をなすは理論上解すべ
 からざる事柄なり然るに猶太人の所謂神は其出逢ひたる有力の蠻酋なりとせば
 經典に記する所皆理論上解するを得可し

第十一章 社會の進化

第一節 社會の有機性

論者或は云ふ社會は實物に非ず空名なり單に多人數の總稱なりと論者の言誤
 れり何といふに一個の社會は充分に固結する分子より成らざるも幾分固結す
 る分子より成るは其歴世累代同一の土地に於て大體上同一の組織を存するを以
 て知らるゝが故に社會は一個の物體にして機關を備へりと云ふべし故に社會と
 云ふ名稱は國家の固く定まりたる群民に附すべきも團結の變化常なき群民に附
 すべからず社會は通例の有機物に數等勝れる性質を有すれども其發達進化の順
 序模様に至りては大に普通の有機物に似たる所あれば亦一種の有機物と云ふも
 不可なきなり

凡そ無機物は發達成長の著しからざるに一般の有機物并に社會は發達成長の
 著しきなり凡そ社會は有機物に等しく形骸の長大になるに従ひ組織の緻密にな
 るなり下等の動物も高等の動物も其胚胎に於ては形骸小にして軀部相異なると
 少し然るに形骸の漸く長大になるに従ひ軀部許多になりて相異なると著るし此
 理亦社會の發達にあり凡そ社會は有機物に等しく軀部漸く許多になりて相異な
 るに従ひ作用亦漸く多端になりて相異なるなり凡そ社會は有機物に等しく軀部

(四八)
 の互に關係すると多し無機物の分子は互に關係すると甚だ薄く一分子の變易成敗は他一般の分子に影響を及ぼすとなきに有機物並に社會は分子中の關係甚だ密にして一分子の變易成敗は必ず他一般の分子に影響を及ぼし而して此影響は有機物並に社會の進化するに従て益々廣大になるなり

夫れ金石の塊は其一部を裂き取るも其成長に害を及ぼすとなし動物は如何に下等なるも種々の臍部を備へ種々の臍部は相待ち相依て成長するなり尤も最下等の動物には或は臍部殆ど皆消化の機なる者あり或は呼吸の機なる者あり或は運行の機なる者あり斯くの如き動物には臍部の相待ち相依る事少なし高等の動物に至れば臍部各其作用を異にすれば必ず相待ち相依るべし假りに人臍を以て譬へん人臍に手足あり耳目鼻口あり腸胃あり腸胃は消化の機なりと云へども飲食の香味を掌どる能はず肉を碎き菜蔬を裂く能はず肉を碎き菜蔬を裂くは齒牙の掌どる所飲食の味を知るは舌の掌どる所飲食の色に依て毒の有無を察するは目の掌どる所飲食の香に依て其性質を知るは鼻の掌どる所物の音聲に依て物の性質を知るは耳の掌どる所なり飲食の物を口に運ぶは手の掌どる所飲食の物を得んとして人臍を其所に致すは足の掌どる所なり故に足は歩するを嫌ひ手は物を取るを嫌ひ腸胃何をか消化する之れに反して腸胃にして食物を消化し生血を生するに非ずんば手足何に依てか滋養を受けん故に腸胃其司を怠れば手足忽に困し手足其司を怠れば腸胃忽に萎凋す他諸機關皆相待つと腸胃手足の相待つが如し

人間社會に分業と云ふとあり俗に云ふ餅屋は餅屋酒屋は酒屋にして商工各専門ありて互に相待つとは是なり分業といふとは初め經濟學者が經濟上の現象に於て發見したるとなるが單に經濟上の現象に止らず普く社會一般の現象に拘はるなり夫れ社會には政府と云ふ者あり人民と云ふ者あり政府は社會の秩序を保ち人民は農工商に従事して社會の財富を作る然るに政府は其費用を人民に仰ぎ人民は其保護を政府に仰ぐなり此れ政府人民は互に業を分ちて相輔くるなり人民又事業を分ちて或は農となり或は商となり或は工となる

又有機物と社會との相似るとは其分子皆活物なるを知る時は益著るしくなるなり海綿は一種の有機物なり膠質物に蔽はれたる織緯より成る顯微鏡を以て此

膠質物を見るに無數の活動物より成るを知る此無數の活動物は相合て皮肉を成す皮肉を成すに由て幾分か各個特有の性質を失ふが如し又膠質物を保持する纖維の組織は彼活動物共同の作用に由る又活動物共同の作用は海綿全軀に縦横に存する水流を生ずるなり水流は小孔より入り大孔より出るなり碩學ハックスレー曰く海綿は一種の水中城郭の姿を顯し此城郭中に住民ありて市街道路を成して居宅を占め水にして其居宅の傍に流れ來れば其水中より滋養の料を汲み取るなりと此理高等動物の全軀と分子との間に存せり動物の血は流動軀なり流動軀中に細球あり細球皆活動物なり此活動物の血管に於けるは尙ほ海綿の軀中に存せる活動物の海綿軀中に存する水流に於けるが如し海綿といひ高等動物といひ其軀内の分子は皆活動物にして人間社會の分子なる人間の活動物なるに異ならず斯く社會と有機物と相似る所多しと云へども亦相異なる所あり其相異なる所は動物軀中の分子は互に密着固結すれども社會の分子なる人間は互に密着固結せず動物軀中の分子は相連り相結びて分離するとなきに社會の分子なる人間は互に手を握り互に腕を組み互に軀を連ねて一所に居住するものに非ず人間は只

然るのみならんや地を隔て所を異にして身體上大に相隔りて居住するものなり其能く連絡する所以は感情と言語との二物なり人は相感む相思ひて初めて相合ひ相助くるなり人相語り相告て初めて相知り相親むなり

斯く社會の分子なる人間は纔かに情感上言語上の連絡を有するも他に密着固結する所以なきが故に全く相異りたる性質を有する事動物軀中の分子の如きを得る能はず動物軀中の分子は密着固結するが故に性質相異なり作用相異なるも互に相助け相待つ事容易なり人間は然らず必ず相隔て生活するが故に其一部分は知覺を専らにし他の一部は全く知覺を欠くを得ず何と云ふに人間は相隔て生活するが故に相助け相待つ事動物軀中の分子相助け相待つ如き緻密を得る能はずして自然各人個々に自ら覺り自ら營まざるを得ず人軀の分子之を大別して知覺を有する者知覺を有せざる者とする時は腦髓獨り知覺を司り他は皆知覺を司る能はず人軀中の局部腦髓を除き他は皆知覺を有せずと雖ども腦髓との關係密にして容易に腦髓の指揮を受く可きなり社會の組織を大別して政府と人民との二物とす政府は社會の腦髓なり人民は社會の五軀なり然して社會の有する腦

隨と五臓との關係は人躰の有する腦髓と五臓との關係の如く親密周到なるを得ず故に政府は獨り智識を専らにし人民をして智識を欠かしむる能はず人民にして智識を欠かば自ら覺り自ら營む能はずして遂に衰亡するに至る夫れ歴史を閱するに智識は獨り政府にありて全く其跡を民間に絶ちしより國家の外寇に亡ぼされし例證少なからず政府にして智識を専らにし人民をして無學無智ならしむる時は政府益々干涉を人民に加へ人民政府の干涉を受くるに従ひ益々獨行自營する能はず人民獨行自營の氣象を失ふ時は益々偷安姑息を事とす偷安姑息を事とする人民は一朝外寇の起る時政府の頼みて以て助となす所に非ず故に政府智識を専らにして人民の智識を奪ふ時は國家の亡びざるもの古今之れあることなし

第二節 社會の成長

社會は有機物に等しく成長するものにして小より大に至り尋常の大より非常の大に至るものなり社會は有機物に等しく種類多くして種類ごとに成長の程度を異にす動物にプロトゾアと云ふ者あり成長の極度に於ても其躰を見るに顕微鏡を要す動物に芥大のものあり豆大のものあり動物の大なる者に至りては牛馬虎豹象獅子あり動物種類多く種類ごとに躰の大小を異にする事既に然り社會亦然りウイロペーダ蠻族は纒かに數夫婦よりなれる團結を爲す數夫婦の離合集常なしヒュイリアン蠻族は纒かに十家又は二十家よりなれる團結を爲すポロニシア群島には蠻族數千人又は數万人相集りて部落をなす今日の開化國は皆少くも三四千萬の人々を有する社會なり英國の如きは其本國の外に多く殖民地を有し人口の總數億兆なりと云ふ

凡そ社會の成長するは有機物の成長するか如く二種の方法に由る其一種の方法は一團結中の分子が増加する事今一種の方法は數多の團結が相合ひて一大團結を成す事是なり此二種の成長法は同時に共に行はるゝ事あり又時を異にし相關せずして行はるゝ事あり社會の分子は人なり社會の成長は人數の増殖すると數多の村落又は數多の都邑の相合ふとの二方法に由るなり野蠻人の一團結を成して一定所に群居する時其地膏腴にして穀物人力を待たずして成熟し其氣候暖和にして人生に適するに非ざれば人數の増殖する事容易ならず野蠻人は耕作の

第三節 社會の組織

(五四)

術に迂遠にして耕作の具を有せざれば自營自食する能はずして偏に天然産の物を以て食料に供するなり天然産の物即ち人力を用ゐずして産する五穀菓實魚介鳥獸の供給充分ならざる時は野蠻人必ず餓死すべく又餓死を免かれんとするには相別れて他所に移り住まざるを得ず故に斯の如き場所に於ては人數の増殖する事なし野蠻人中に一村の人數常に四五十人の上に出てざるは全く此の理に基するものなり斯の如き小人數の村落にして相合ふ時は一大種屬成立すべきなり又斯の如き大種屬にして他の大種屬と相合ふ時は一大社會の成立すべきなり

凡そ一團結を爲す群衆は兩部に分れ一は酋長となり今一は從屬者となるなり今群衆大に増殖する時分れて兩部となり一は群衆の制御を司とる者今一は勞働して群衆全體に衣食を給するものは是なり此事下等種屬に於ても著しく知らるゝなり下等種屬に於ては男子一般に其種屬の制御を司どり女子一般に勞働を事とす男子中をのづから強き者あり弱き者あり威ある者あり威なき者あり強くして威ある者をのづから其種屬の酋長となる酋長にして其威權を固くしたる時は其種屬を制御する事大なるべく種屬にして其酋長に制御せらるゝ事大なる時はをのづから強大を致し他の種屬と戦つて勝つこと多かるべし戦て勝つ時は降者を以て虜囚とし虜囚を以て奴隸とす奴隸は皆賤業に従事する者なり奴隸を蓄ふる事多き種屬に於ては女子と奴隸とは力役に従事し男子は逸遊して戰爭を業とす此に因て此を見るに一種屬に於て制御者の威權發達するに及て一種屬の中をのづから事業を異にするに至る事業を異にするとは所謂分業是なり

凡そ業の分るゝは粗大より細小に及ぶ僧侶祭官を以て譬へんに下等人種に於ては一人にして巫醫祭官占考者の業務を兼ねるなり社會進むに従つて巫醫祭官占考者は各専門となり一人の能く兼ねざる所となる夫れ佛教の如き宗派分離して多端となり禪宗の如く淡泊にして靈物の有無に意を注がざる者あり眞宗の如く佛徳を尊む餘りに人を以て生佛と視傲す者あり又昔時中臣氏の如きは元來祭官なりしも兩分して中臣藤原となり中臣は前の如く祭官なるも藤原は宰相の家柄となりしを見ても事業の次第に相異なり相分れて止る所なきを知るべし

凡そ社會の局部は其構造の大體より云はゞ皆同一の有様を備ふる者なり一社

會則ち一國に於ては織物を業とする都會あり陶器を焼くを以て業とする都會あり學者書生を養生するを以て業とする大學校専門學校より組織したる都會あり英國のケンブリッジ並にオクスホルトの如きは大學校専門學校より成りたる都會なり斯の如き都會皆社會の局部なり各其業を異にすると雖も其業を爲す所以の組織零ぼ相同じからざるを得ず織物陶器の製造には必ず其原質物を他より求めざるべからず之れを求むるには之れを他より輸入せざるを得ず又製造器を賣るには之れを他へ輸出せざるを得ず原質物の輸入製造器の輸出共に汽船汽車を要するなり學者書生の大學校専門學校に往復するも亦汽船汽車に因らざるを得ず電信は汽船汽車の如く何れの都會にも必用なり又何れの都會にも汽船汽車電信を設置せる上に施政上警察上裁判上宗教上に關する制度なかるべからず斯く社會の局部則ち一國の都會は皆其構造を同一にすれども又其業を異にするが故に相待ち相依らざれば成り立つを得ず織物の製造を業とする都會は織物の外は萬事萬物に付き他の都會に依らざるを得ず陶器の製造を業とする都會學問を業とする都會も亦然り

凡そ一社會の局部中何れも社會全體の發達に從て發達する者は其發達急速なるを得ざるも新たに他社會の模倣に出たる者は其發達急速なるを得るなり夫れ小兒に齒の成り出るは歲月を要すれども老人の口中に齒を入るゝは齒醫者一日の勞を要するのみ社會局部の發達に於ても大に之れに類する事あり我國の官吏社會は我國大社會の一小局部なれども全く西洋の模倣に出たれば僅かに十數年にして今日の盛大を致すを得たり地方に行けば茅屋弊舍の中に巍々として天に聳ゆる西洋造りの小學校あり是れ又人民進歩と共に進歩したるに非ず全く西洋の模倣に出たるなり

第四節 社會の作用

凡そ物の組織に變化の生ずる時は其作用にも變化の生ずるなり此理亦社會の上にて著るし故に前章に述べたる社會の組織論は既に社會作用論を含み居るなり然るに社會の作用に特質ある事多き中に或は社會の組織を窺ふのみにて知るを得ざる者あり今此に斯る作用の特質を記すべきなり

凡そ物の組織即ち物の構造にして粗麁なる時は其局部の相依り相待つこと甚

(五八)

た少しと云へども其組織にして緻密に成るに隨て其局部の相依り相待つこと益々多くなるなり局部の相依り相待つこと益々多くなるとは即ち局部の作用益々複雑に傾くなり局部の作用益々複雑に傾くとは即ち物の作用に複雑の増加するを云ふ此理亦社會の上において社會の組織粗鹿なる時は其作用緻密ならず社會の作用緻密ならざる時は其局部の相依り相待つと甚だ少し夫れ野蠻人の水草を追ひ住居を定めざる者其人數多しと云へども容易に分離四散するを得群衆の容易に分離四散するを得るは取りも直さず人々の相依り相待つとの甚だ少きが故也斯の如き社會に在りては人々皆戰士獵師漁夫の業を兼備する而已ならず其住む小屋を作り其用ある器具を作るなり要するに一人にして萬能に通じ萬藝に長じたるなり斯く萬能に通じ萬藝に長じたる人は其妻子を携帶して他所へ轉住する事容易なり社會の高く進み其人の業を異にするに至りては人々の相依り相待つこと深密なるが故に人々容易に相分れ相離るゝ能はず人々相分れ相離るゝ事容易ならざる而已ならず一都一邑の住民にして其社會即ち其國を去りて他社會即ち他國に移り往く時は其社會即ち其國の蒙むる傷害至大なる可し其甚たしき

に至りては其衰亡を招く可きなり今之を譬ふるに我日本國を以てせん乎我日本國は一大社會なり薩長土三藩は各日本社會の局部なり南部津輕も其局部なり箱館松前も其局部なり美濃尾張も其局部なり東京固より日本社會の局部なる而已ならず其局部中の最も重要なる者なり薩長土の士民にして日本を去りて外國に往くことあらば廟堂に政治を議する大臣參議なかるべく民間に在りて政治を論談する政論家なかる可し箱館の住民にして日本を去りて外國に往かば氷の製造人其跡を日本に絶つ可し暑中に於て氷の無き時は社會の事業大に滯滞す可し南部の野馬にして外國に逃奔する時は我國の兵馬大に其威勢を失ふ可し美濃尾張は眞宗信徒の多き土地なり此土地の士民にして無人島又は千島に移り往かば耶蘇教直ちに日本に蔓延するを得べし東京は輦轂の下なり東京にして萬一外人の爲めに亡さるゝ事ある時は日本全國の命脈は殆ど絶滅するに至る事猶ほ人の腦髓にして大傷を負ふ時は立どころに亡ぶるが如し是に由て之を觀るに日本全國の其一部一都に於ける猶ほ人跡の其腦髓手足等に於けるが如し

凡そ物は有機物と社會との論なく其局部にして作用を異にする事甚た大にし

て活力を増す事愈々大なり物の局部にして其作用を異にするに隨て其作用を精巧にする傾向あり局部の其作用を精巧にする時は相互に裨益する所益々多大なり斯る時は一局部が他局部一般に裨益を加ふる事多く又他局部一般の此一局部に裨益を加ふる事多かる可し一物体内中の萬般局部にして其作用を盡すを以て此一物の生命活動と云ふ去れば一物体内中の萬般局部にして其作用を活潑にするに隨て此一物の生命活動益々活潑になるなり

第五節 社會の諸機關

進化の原則に由れば諸種の動物皆其胚胎の時に於ては形體上に於て相異なる事なし其發達の次第に於ても最初は大に相類するなり此理亦社會の上に於ても存するなり社會には種類多く大小同一ならずと雖も其發達の順序次第に於て大體上相異なる事なし

社會の發達するや其全體兩分して内局部外局部となり内局部は社會全體の整理を司り外局部は社會全體の養育を司るなり野蠻社會に於ては男子一般に其社會の整理を司り女子と奴隸とは其社會全體の爲め農業工業等の職業に従事す内

外兩局部に遅れて發生するものは中間局部なり中間局部は内局部と外局部との中間に立て其有無を通じ其交通を計るなり要するに運輸を専務とする者なり人體に至りては外局部を消化機と云ひ内局部を思想機と云ひ中間局部は輸血機と云ひて動脈靜脈より成る社會に於ては外局部は農工より成り内局部は智者學者より成り中間局部は商賈より成る農工にして社會の滋養物を作る猶ほ腸胃にして食物を消化して生血を生じ人體全部を養ふが如し智者學者は社會の進退を左右する者にして其最も賢明なる者朝に在りて卿相となり野に在りては政論家の首領となる事猶ほ腦髓にして人體全部の舉作を左右するが如し商賈は社會必須の滋養物を一所より他所に輸送する者にして血管の生血を一所より他所に輸送するに異ならず

第六節 保養機

人體中に血液を生出する機關あり是れ人體の保養機なり社會には其全部を保養する所以即農工物産を生出する機關あり是れ社會の保養機なり社會の保養機は人體の保養機に均しく一定の規律に従て發達進化するなり其中に種々區々の

局部生出するも亦人體の保養機と均しく一定の規律に従ふなり而して如此規律中最大至要なる者は機中の局部の位置に係はる者なり

一社會に起る可き産業一ならずして互に異ならざるを得ざる所以に二あり産業地の地質位置相異なる事其一なり一産業の既に一地方に興りし後は他の産業にして此産業に原質物を仰ぐ者亦必ず此地方に據らざるを得ず是れ其二なり凡そ一社會の據る土地は全面一樣の性質を有せず有機物に富める所あり無機物に富める所あり有機物に富める所は魚介に富める海濱良材に富める森林等をいふ無機物に富める所は金石を出す礦山石油を生ずる坑穴等を云ふ魚介に富める海濱に於ては漁業興り良材に富める森林地方に於ては木工興る金石を出す礦山石油を生ずる坑穴に接したる地方に於ては此天然産に相當したる工業興るべきなり譬へば凡そ工業は人力を省かんとする時は水車の力を藉る者なれども水利に不便なる時は蒸氣機關の力を藉らざるを得ず此力を藉るには石炭を要し石炭を要するには工場を炭坑近邊に置かざるを得ず

農工産物は社會の由て保養を爲す所なり故に農工は社會の保養機なり之に反

社 會 學

社

會

學

して政府は社會全部の整理を司る者なり即ち社會の整理機なり此の保養整理の二機は同じく一社會の局部なれば皮相より論すれば發達進化を共にす可く見ゆれども其實然からず何と云ふに農工區域の發達進化は政治區域の伸縮に係はらざればなり製茶養蠶牧畜米作は皆田地に係はる者にして相異なるは其處の政治如何に由來するに非ず宇治は製茶適當の地なり上州は養蠶適當の地なり某地は牧畜に善く某地は米作に叶へり此數ヶ所に特種の良産あるは其所の大名政治の下に有りしに由らず藩政の下に有りしに由らず府縣知事の管轄を受くるに由らず全く其地質風土の異なるに由る製茶養蠶等の政躰政區と伸縮を共にせざる事既に然り此事鐵工織物等の製造に於て最も著し英國に於ての鐵工場にして三四縣に跨り木綿織物場にして亦數縣に亘る者ありとぞ是等の大製造場は數個の政治區域を包羅する者と云ふ可し中世に今日の白耳義邊にフランダールと云ふ土地ありき羊毛織物場を以て有名なり羊毛織物の事業此土地より漸く南に進み法國北部に蔓延せしと云ふ是れ一個の製造場非常に發達して終に數國に跨りし者と云ふも不可なきなり要するに製造の擴張は國境も能く遮る所に非ず

斯く保養機即ち製造事業は其本土元地の變遷に係はらず發達して終に其本土元地に對する關係を失ふに至る事明白なり然るに整理機即政治組織は幾多の沿革を經るも全く其本地元土に對する關係を失ふことなし我が國に於て藩を廢して縣を置きしも數個の小政治區域を合一して大政治區としたるに止まれり又廢藩置縣の後に於ては小縣を合して大縣とし漸く縣の數を減じたるが如し廢藩置縣小縣合併は勿論其地の行政者に於て多少の權力増減を生じ其地の政治區域に於て多少の伸縮を來し、も前後の制度相關し前後の政治區域互に係はることなきを得ず社會の整理機は保養機と發達進化の模様を異にして其本土元地の沿革に拘らず全く此本土元地に對する關係を失はざる所以なり

第七節 運輸機

國道縣道の如き廣大至便の道路は社會進化の高度に達せし後の事なり國道と云ひ縣道と云ひ其起原を探くる時は皆元來猪鹿の往來せし所にして後に至り人の亦通行せしより漸く廣大至便になりしと知る可し道路の漸く開け修繕を受くるは商賈輻輳の地を以て始とす又商業繁劇にして鐵道興る尤も道路の用に二あり一は軍事に供するなり今一は商工の便に供ふるなり昔時羅馬人天下を一統せし時天下の交通を至便にして鎮兵征軍を屬國反國に派遣するを容易ならしめき今日の魯西亞亦道路を軍用に供せり故に其の新に鐵道を布設するや迂曲して都會製造場を通行せず千里の曠野を通行して鎮兵府と中央政府との交通を至便にせり

都邑の間に道路開け交通便利になるに隨て都邑に於て商賈の輻輳繁く市場の開會多くなるなり交通不便の都邑間には商賈往來して市場を開くは年に一度なるも交通便利になるに隨て春秋に市を爲し交通の便利尙ほ進ては春夏秋冬毎年四回の市場を立つ尙ほ一層進みては商賈月を隔て相會し又毎月一度二度三度四度と次第に市會の日數を進るなり我國に於て四日市三日市何日市と云ふ地名の今に存し居るは是れ昔時曾て毎月度數を定めて市場を立てしとある明證なり

道路平安運輸至便になるに隨て性質精巧の物品を運輸するを得べし道路嶮阻にして運輸馬背を要する際には輸出すべき物品は粗悪ならざるを得ず精巧の物品は至て破損し易き者なれば馬背に積て高嶺嶮處に運搬すへからず精巧の物品

にして安全に輸送せらるゝは鐵道瀛船の出來し後のとなり又交通の便開けて商業上の競争廣大なるを得昔時我が國に於て米穀を積むにも五百石以上を積み得る船舶なかりき江戸の米相場商が大阪の米相場を知らんと欲するも大阪より江戸に到る飛脚は極めて迅速なる者にして四五日を費し其の飛脚は只一封の書狀を掲げ來るが爲めに正金四五兩の賃錢を請ひしと云ふ此頃の四五兩は實價今日の四五圓に非ず四五十圓に相當するならん斯く音信不便なる時に於ては商業上の競争は幾分有るにもせよ今日の如く廣大なるを得ず今日は瀛船瀛車を以て物貨を運送すべし東京大阪間の音信は一瞬間と數十錢の電信料とを要する而已なり瀛船瀛車電信は謂ゆる文明の利器なり文明世界の商人此三大利器に由て競争するが故に其競争の範圍廣大無邊にして容易に際涯を窺ふへからず

第八節 整理機

整理機は社會外の事物に應じて作用を爲すなり保養機は社會内の事物に應じて作用を爲すなり故に保養機は社會内の事物の性質景況に由て其發達を遲速し整理機は社會外の事物の性質景況に由て其發達を遲速するなり社會外の事物とは重もに猛獸仇敵の社會に災害を加ふる者を云ふ社會の猛獸の爲めに災害を蒙むるは社會發達したる時にはなきとなれども仇敵の爲めに災害を被むるは其大に發達したる時と云へども尙ほ免かるゝを得ず

凡そ社會と社會との間に起る戦争は雙方の社會に於て政躰の組織を發生し其組織中にも特に一社會の人を擧げて同心協力もて仇敵を防禦せしむるものを強大にするなり一社會の人同心協力して事を計るには之れに相當せる景況を要するなり同心協力に必須の景況とは一に社會に衣食の不足せざると二に一社會の人相接して群居すると三に一社會の人性質從順にして相互に交情を盡し意見を容るゝと是れなり社會にして此景況を欠く時は人々同心協力するを得ず人々同心協力するを得ざる時は一定不動の酋長を有するを得ず一定不動の酋長を有するを得ざる時は仇敵に襲撃せらるゝに當り防禦の策に乏しきが故に容易に亡滅せらるゝなり

政躰組織の成るは一種族一社會に酋長首領の生ずるを以て始めとす戦争の始めて一種族一社會に政躰組織を生ずるとは酋長首領を生ずるを云ふへり原人社

會に在りて平常無事の時に在りては人々其欲する所を爲し決して他に從ふとなし猛獸を獵し毒蛇を捕ふるとあらば其時に臨み暫く先導者を置なり一種族にして他種族と相争ふと久しきときには常に酋長を置き且又其酋長の権力益々強大に傾くなり此事一社會の首領に於ても同然なり

又數多の小社會にして共同の仇敵を防禦する爲め連合して一大社會を成す時は此大社會の首領に於ては其權勢を増すと至大なり在昔猶太の諸種族は元來利害を異にしたるも近鄰異種の諸民族と戰爭を爲すに及ひて始めて連合して一大國を爲せり其時猶太の國に在りしは初代の王ソール盛徳の王デビッドなりきソールの前には王を立てず家長政治と云ひて同種族の年長高望の人祭官の名を以て政治を爲したりき國王の權勢祭官の權勢に比するに霄壤の相違あり希臘の雅典國は波斯人來寇の際希臘群島並に沿海の都邑を連合して一大海防同盟を組織し自から其長となりき我朝に於て在昔藤氏權勢を貪りて飽くなく終に天下の政事を如何ともする能はざるに至れり此時に天下に武士なる者あり武士は皆國郡に在りて廣く地を占め多く徒を養ひ自から一團結を成せり此の如き團結の數擧げ

て算すへからすと云へども其中の最大なるは平氏源氏なり平氏源氏の二大團結相争ふに至り他の小團結皆自全の爲め地勢に由り或は此れに従ひ或は彼に従ひたるか故に天下無數の團結其數を減じて僅に二個となれり此に於て平氏源氏の勢力増々張大を極め終に天下の大勢を一變するに至れり此の如き事應仁以後の戰國時代にも多く見る所なり

政躰即ち整理機の發達は其局部の増長分化するに在り整理機の局部にして増長分化するは社會の既に大にして複雑せるを要するなり社會の大にして複雑せるは其數多の小社會より成ればなり此連合社會の始め連合するや鞏固緻密ならざるも次第に鞏固緻密になるなり此の如く連合の鞏固緻密になるは戰爭の絶えざるに由來す戰爭の絶えざる時は自然連合を爲したる諸社會の首領中に於て強大社會の首領獨り其權を張るを得て他小弱社會の首領皆其權を失ふ傾向あるが故なり戰爭には命令の專一なるを要し將軍は軍に在りて王命を聽かすと云へり諸將相會して軍事を議すれば小田原評議に傾くへし諸將相議して合はざるは敗軍の兆なり故に數多の社會連合して共同の仇敵と争ふ時は強大の社會獨り軍事

(70)
を専らにせざるを得ず軍事を専らにする社會の首領之れが爲め自然兵馬の權を専らにするを得へし社會の強大に爲り首領の權を増すに隨ひて自づから首領の職掌も増すへきなり首領一人にして其職掌を盡すを得ざるが故に輔佐を置く輔佐或は副將となり或は刑事を司とり或は顧問規諫の事に當る兵馬の事治民の事之れを司とるを行政の務とす民と民との間に起れる訴訟並に民と社會全體との間に起れる訴訟之れを司とるを司法の務とす行政と司法とは政府三大務の二なり是の他の一は立法なり立法を以て務とする者は社會の首領に非ずして社會全體の人民なり故に立法部を行政司法の兩部に比すれば發達遅緩なるへくして大に此兩部の所爲に支障を與ふるとあるへし然れども立法部は社會の大に進化するに至りて終に他兩部に凌駕するを得

第九節 社會の種類

艸木禽獸の種類は數千年の久しきを経るも其本質上重大の變化を受くるとなく外界景况の變化するより自から幾分の變化を受くるも其變化は單に其外形に限り深く其内性に及ふとなし故に善く皮相上異體の艸木禽獸を一緒にして同種に收め又其外形上不同の諸種を一類に歸するを得然るに人の組織する社會に於ては變遷を経ると頻繁にして至敏なるか故に社會の種類を定むると甚だ難し尤も原人の群集は昔大なるに至りて分離し又其分離したる各部も大なるに至りて亦小分するも本末前後の群集相互に異なる性質を帯びされは其種類の異同を知ると容易なれども進化の高度に達したる社會に於ては其本質上の異同を知ると容易ならず何と云ふに進化の高度に達したる社會は容易に分裂して新社會を生み出せず若し一大社會にして人民を他所へ移して殖民地を設くる時此殖民地は本國の制度に基て國を成すも殖民地は事變に應じて經營を爲すと容易なるに本國は事變に應じて經營を爲すと容易ならされは自から久しからずして本國と殖民地との本質上同種一類なるを發見するに大に苦しむとあるへし是れ數多の人間社會に就て種を定め類を立つると艸木禽獸の如く容易ならざる所以なり

去れども社會の種類は全く定め難しと云ふに非ず今、不充分の種類を定めんとするに二法あり一法は社會の組織の上より單純社會複合社會三重複合社會と云ふか如くに社會の種類を立つると今一法は社會の性質に由り社會を二分して尙

武社會尙工社會とする是なり

凡そ社會の種類を別つに其單純複雑を以てすると次の表に示すか如し

學 會 社

會 社 純 單

- (一) 會長を立てざる者
 - (イ) 専ら牧畜を業とする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専業とする者
- (二) 臨時に會長を置く者
 - (イ) 牧畜を専業とする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者
- (三) 堅固ならざる者
 - (イ) 牧畜を専らにする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者
- (四) 堅固なる者
 - (イ) 牧畜を専らにする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者

學 會 社

會 社 合 連

- (一) 臨時に會長を置く者
 - (イ) 牧畜を専らにする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者
 - (二) 堅固ならざる者
 - (イ) 牧畜を専らにする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者
 - (三) 堅固なる者
 - (イ) 牧畜を専らにする者
 - (ロ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ハ) 農業を専らにする者
- (一) 九世紀以前の英國
(二) 五世紀の日耳曼種屬
- (一) 亞非利加の野蠻國
(二) 亞刺比亞の都邑

會 社 合 連 重 二

- (一) 臨時に會長を置く者
 - (イ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ロ) 農業を専らにする者
 - (二) 堅固ならざる者
 - (イ) 牧畜農業を兼ねる者
 - (ロ) 農業を専らにする者
- (一) 雅典同盟
(二) 六世紀より九世紀に至る時代の歐洲諸國

三重連合社會

開化國

- 近代
 - (一) 大不列顛合衆王國
 - (二) 佛蘭西共和國
 - (三) 日耳曼帝國
 - (四) 伊太利王國
 - (五) 露西亞帝國
 - (六) 日本帝國
 - (七) 支那帝國
- 古代
 - (一) 墨是哥帝國
 - (二) 亞志利亞帝國
 - (三) 埃及帝國
 - (四) 羅馬帝國
 - (五) 波斯帝國

酋長の權
堅固なる者

- (イ) 牧畜農業を兼ねる者
- (ロ) 農業を専らにする者
- (一) サンドウィッチ島
- (二) 二十世紀の英國

(一) 尙工社會

(二) 尙武社會

- 近代
 - (一) 日耳曼のハンス都邑
 - (二) 和蘭陀共和國
 - (三) 英吉利西國
 - (四) 北米合衆國
 - (五) 十二三世紀の伊太利諸都邑
- 古代
 - (一) フェニシヤの諸國
 - (二) カルセーション共和國
 - (三) 希臘の雅典國
 - (一) 埃及帝國
 - (二) 希臘のスパルタ國
 - (三) 羅馬共和國並に帝國
 - (四) 波斯帝國
 - (一) 露西亞帝國
 - (二) 獨逸帝國

又社會の種類を別つに其活動の摸様に由ると次の如し

近代

- (三) 佛蘭西共和國
- (四) 土耳其帝國
- (五) 支那帝國
- (六) 日本帝國

(七六)

第十二章 男女の異同

第一節 心臓組織の異同

男女の異なるは心の上より見るも肺の上より見るも人の父人の母として各特別の職務を有する事是なり女は男に比するに心臓の發育早し幾分自身發育の氣力を削りて之を妊身舉兒の大勞に供せざるを得ざるが爲めなり男の發育は成る事晩く疲勞滋養の相平均するに非されは止まざるなり女は然らず滋養は疲勞に比すれば尙ほ多きも發育は既に中絶するなり故に處女は少男に比すれば人に成る事早く又男女の異様は其肺格に在り男の肺格中に於て著しく女の肺格に異なる所は外物に對する勞動に要する肺部の長大なる事なり人の肺部中にて直接に勞

動に關係するは四支胸膈なり男女の四支胸膈を比較して其大小を知るへし男は四支胸膈大なるが故に空氣を吸ふと多し空氣を吸ふときが故に酸素を吸ふと多く酸素を吸ふとき多き時は炭素を吐くと多からざるを得す何と云ふに酸素炭素の調和なき時は人體の溫度作用其宜きを得ざるなり女は四支胸膈小なるが故に空氣を吸ふと少し空氣を吸ると少きが故に酸素を吸ふと少く酸素を吸ふと少き時は炭素を吐くと少からざるを得す又炭素を吐くと多きを要する時は炭素多量の食物を要すると多し肉食は炭素多量なり蔬菜は炭素少量なり

女は男に比すれば一生中特に妊身中に空氣を吸ふと少し故に女には活力の發育甚だ不充分なるを知るべし女は自身の發育早く止まるが故に自然神經の組織筋肉の組織も發育甚だ不充分にして五臓も腦髓も男に比すれば小弱なり腦髓小弱なるが故に心の力量亦小弱なり因て女は思想遠大なる能はず又無形の議論是非の判定をなすに適せず

第二節 心臓効用の異同

父母の其兒に接するに當り母の肺格顔貌の父の肺格顔貌に優れるは何人の目

(七七)

にも明なり

凡そ父母の其兒を愛するは兒の孱弱を憫むより起るなり故に愛兒の情は其大要より云はゞ父母の共に有する所なるも其鎖末に就て云はゞ母の兒を愛するは遙に父の兒を愛するに優れり抑も父は小兒一人の極弱を憫むより寧ろ妻子眷屬一般の無力を憫む習なるに母は専ら小兒一人の爲めに情愛を盡して殆ど他に顧る所なきが如し母の其兒に對して盡す情愛既に然り其舉動亦之に叶へり此情愛舉動の影響は單に小兒養育に限らず遠く家庭教訓に及ぶなり

因に云ふ今日の日本に於ては上流社會下流社會共に資産に乏し故に上流社會に於ては婦の夫より受くる遺物中貴きは男兒に若かす下流社會に於ては女兒を寶物とす因て知るへし女の其兒を愛する事厚きも亦時勢と國柄との然らしむる所なるを

第三節 美勝醜敗論

是より男女の間交儀に就て論せん優勝劣敗の論に據るに諸蠻屬の内に於て男の性質強剛勇猛進取自愛なる者は必ず勝ち然らざる者は必ず敗るゝなり此の如

き野蠻社會の中に在る女は如何なる手段によりて生命を保全するを得るや強きと男の如くにして宜しきや否然らず女は元來強を以て男に敵すへからず老莊の言に由らは女の以て能く男を制するは柔なり社會學者の言に由らば次の如し

- 第一 巧に快樂を男に與ふると
- 第二 巧に心底の實情を隠して之を男に知らさぬと
- 第三 巧に説諭を男に入ると
- 第四 疾く人の喜怒心情を知ると

女にして此四質を有せば男を制するを得ると疑なし晋の驪姬唐の武后埃及の女王クレオパトラ那破烈翁三世の皇后ユーシニーは皆能く男を制したるなり驪姬武后の事は何人も善く知れる所なりクレオパトラは羅馬の名將ポンピアントニイシイザイ等を手玉に執りたり故に羅馬の名將は天下萬國を征服し美婦人は羅馬名將の身軀を制御せりと云ふ諺あり千八百七十年に普佛戰爭に佛軍の敗を取り巴里府の落城せしは佛軍の退きて府城を守らんとせしに皇后ユイッニイの類に進軍急撃を勧めしに由來す決して那破烈翁並に大將マクマホンの軍略を闕

きたるに非ず首相ピスマルクの軍法に長じたるが故に非ず單に皇后の不利の戰爭を勧めたるが故なり

男の女に由て快樂を得る所以の中最も著大なるは女の美なる事なるへし美女の醜女に於けるは強男の弱男に於けるが如く美女勝ちて醜女敗るゝは勢の然らしむる所なり美女勝ちて醜女敗るゝと云ふを俗語に云はゞ美女愛せられ醜女棄らるゝ事なり漢語に美女室に入るは悪女の仇なりと云ふ文句あり妓王妓女の清盛に愛を得たるが爲めに清盛に棄てられたる者多く佛御前の清盛に寵を被りたるが爲めに妓王妓女も亦清盛に疎まれたり又母貴くして子貴く母愛せられて子愛せられ母賤しくして子賤しく母棄られて子棄らるゝ事何人も平生見聞する所なり故に美女勝ちて醜女敗るゝは取りも直さず美人の種を世に永續さする次第なり又言ひ替ふれば人種改良の手續なり

是れよりは美女の安危は國家の安危に關せざるを説かん抑も野蠻世界には戰爭の爲めに一種屬を擧げて滅亡すると常なり支那に於ては晋以後の革命多くは君民間に非ずして華蕃間にあり故に或は華人の敗れて遺類なきに至り或は蕃

人の敗れて遺類なきに至る事あり日本にては源平の如きは互に其族を夷げんとせしなり甲蠻族にして乙蠻族を亡ぼす際多くは男を殺し醜女を賣り獨り美女を載せ婦るなり西洋の例は耳遠ければ和漢の例のみを擧げん清盛の義朝一族を斃せしや義朝の愛妾常盤を納れて妾とせり常盤は主家一族と安危を共にせさりしなり此理亦明治の今日に存せり夫れ例の薩長土三藩は武勇天下に無比にして能く徳川幕府を倒し江戸城を以て其出張所とせり故に徳川の臣民は所謂る亡國の臣民なれば廟堂の要地に在る者甚少し去れども昔時徳川臣民の女にして家敗ふれ父死し自から身を泥中に沈めしも今は社會の上流に居る者少からず凡そ社會上流は廟堂要地の裏廟堂要地は社會上流の表なり因て知る可し徳川遺民中にて今の世に幸を得たるは女に多くして男に少きを

支那の例證を引くに左傳史記に載する所は誰も熟知の事なれば之を省ふきて晋隋間の事を擧げて示さん

第一 敵の妻女を載せ歸る事

西晋の武帝司馬懿の孫は吳を平らけし後大に遊宴を事とし宮女の數殆ど萬人に

及び殊に吳の伎妾五千人を選ひて宮に入れり

東晋の孝武帝の時宋王誕廣陵城に反せしに城終に陥れられたり帝詔を下して曰く城中の士民大小と無く悉く之を殺せと沈慶之請て曰く身の丈五尺に至らぬ者は之を全し其餘の男子は皆之を殺し女子は以て軍賞と爲さんと

後秦の方成秦の徐嵩の壘を破りし時疊中の妻女を掠め之を以て其將士を賞せり

梁の高祖武帝の寶卷を亡ぼし、時宮女三千人を將士に分賞せり

第二 敵の妻女を立て后妃にする事

西晋の愍帝の時漢の劉曜長安を陥れ西晋を亡ぼし、が帝の後羊氏を納れて妃とせり羊氏大に劉曜の寵を得終に立て后となり頗る國事に預れり

西燕の主水秦を亡ぼし其主丕を殺せり其后楊氏を以て上夫人にせんとせしに楊氏劍を引て永を制し、かば永の爲めに殺されたり

後秦の姚萇大に秦の主登を敗り其后毛氏を執へり姚萇毛氏を納れて己の妃にせんと欲せり毛氏聽かすして殺されたり

西秦の主熾磐南涼を滅し其主儁檀を鳩し其女を納れて后に爲せり

魏(北朝)の太武帝夏の主昌の兵を破り統萬城に入り夏の世祖勃々の三女を納れて貴人に爲せり

梁(南朝)の高祖武帝齊朝を亡ぼし、時潘妃の國色なるを聞きて之を納れんとせり諫むる者ありて終に果さず又東昏侯の愛姬余妃を納れて大に政事を忽にせしかど范雲の諫を聽て余妃を遠ざけたり又東昏侯の寵姬吳淑媛を納れて綜を生めり綜成人して魏に出奔せり

東魏(北朝)の高澄高仲密を讃せしに萬仲密死するに及びて其妻李氏を納れたり隋軍の陳を平げし時隋の晋王廣陳主の愛妃張華麗を納れんとせり高穎諫むれども聽かず後に妃寵を極め晋王廣は煬帝の事なり

第四節 婦女の嗜好

婦女は強健の男子を好み之を夫とする傾きあり此の傾は人種保全に關し効用甚だ多し婦女にして無氣力の男子を愛する時は婦女並に其生める子供能く養育保護を愛くる事難かる可し強健の男子と云は、男子にして能く其の妻子を養育

保護する者と知る可し又婦女にして強健の男子を夫とする時は自然其生める子供強健なる可し

男子は美色の婦女を愛する習ひなり而して男子の美色の婦女を妻とするは取りも直さず美色の子供を生ずる次第なり

斯く婦女は強健の男子を好みて之れを夫とし男子は美色の婦女を好みて之れを妻とする時は自から人類は強健にして美しくしき者に成りぬ可きなり

婦女は能く其身並に其子供を養育保護する夫を好み能く妻子を養育保護する夫は即ち強健の男子なり強健の男子は威力多き男子なり而して威力多き男子は婦女の大に好む所なり世に婦女にして能く其夫の暴逆に忍ぶ者あるは其婦女暴逆を悪むと雖ども暴逆を以て威力の餘波と思ひ尙ほ能く其夫を慕ふが故なり

婦女の養育保護を仰がんとて有力の夫を慕ふより何事によらず威力有る所は婦女の好む所となるなり故に婦女は男子に比すれば宗教並に政府を尊み慕ふなり夫れ政府は元來威權の集る所宗教は威光の寄る所なり故に男子は自身の權力を長大にせんとして政府の威權宗教の威光を減縮せんと欲するに婦女は専ら政

府を重んじ宗教を尊みて其倍すく威權威光を添へん事を欲す而して世に政府宗教の能く維持するを得るは婦女の之れを尊重するに由來する事莫大なり凡そ國旗勳章位記鹵簿儀仗等は政府の威權を示す者なるが故に婦女は之れを尊む事甚し神社佛閣に參拜する者を見るに多くは婦女なり

婦女は又万般の禮儀作法を重んじ務て其維持を計る者なり禮儀作法は一種の道德にして禮儀作法の維持は又幾分か道德の維持なり道德は人の依る可き道にして容易に變易す可からざる者と雖も時勢に由り道德の説變する事あり道德の説區々にして多く變する時は社會の基本動く可きなり故に婦女の禮儀作法を維持し自から道德の不變を計るは社會に取て大に利有る事と云ふ可し

第五節 男女相異の結果

男女は其天性より見る時は前に陳へたる如く相反對する者なれども文明開化の薰陶より次第に其特質を減じ等しき性質を持つ事多きを得べし

野蠻世界に於ては男子猛勇なり女子にして猛勇の男子に接し其殘虐を豫防せんには本章第四節に陳べたる如き性質を有せざる可からず開化世界に於ては男

子性質温厚なるを以て女子は男子に殘虐を受くる事無く女子にして男子に殘虐を受くる事なき時は自から女子は殘虐を豫防する性質を失ふ可し之れに反して開化世界の男子は次第に猛勇性質を失ひ柔和の性質を増す可し

女子は開化するに隨うて次第に威力を好む事減すべし又女子にして高等教育を受くる時は智識倍蕘して男子に劣る事少なきに至る可し又開化の世界に於ては婚嫁の時機遅くなり従つて妊身舉兒の事又遅くなり女子身軀の發達早く止まる事なきに至る可し女子身軀の發達早く止まり男子身軀の發達永く續くは之れ男子女子の性質大に異なる所以なりと雖ども此の相違にして尙ほ減少する時は男子女子相及ぼす影響減ず可し然れども今日の文明開化に於ては男子女子の性質を異にする事大にして互に其特質を以て裨益する事多し故に社會學者は此に意を注ぎて社會發達の原理を講す可きなり

第十三章 家族の組織

第一節 總論

家族の何物たるを知るには其の如何にして發生し如何にして成熟し如何にして

進化するやを究めざるを得ず人の親たる者と人の子たる者との間に存する關係の如何にして發生したるやを究むるには書契以前に立ち返へりて究むる所なる可からず書契以前に立ち返へりて究むる所とは生物一般にして牝牡相合て其兒を生じ雌雄相待て其雛を生じ以て其種類を永遠に繼續せしめて中絶間斷すること無からしむる所を指して云ふなり

凡そ死するもの有らは新に之に代る者あらざるを得ざるは生物の何の種類に於ても必須の理數と云ふ可し何と云ふに死する者ありて新に之に代る者無き時は其物の種類は永く其跡を絶つに至らざるを得されはなり生物にして死する事の多き時は其種の増殖する事速にして其死する事の少き時は其種の増殖する事遅きも亦理數の然からしむる所なり此生死の多少と増殖の遲速との關係は生物一般の上に存する理數なれば人の其子孫を生ずる上にも存する理數なり

生物の生を營むに當り其目的とする所多き中にも生物にして水く其種を繼續するを以て第一の目的とし他事は皆之を達する手段にして下等の目的とする時は先づ研究するに此生物第一の目的を達する方法は只一なるや又は數多なるや

の問題を以てす可し下等の生物にして其生命に妨害を加る者を妨禦する力少く又其兒を保養する力少き時永く其種を繼續するは一個の生物にして能く無數の兒を生ずるに非ざれば得ざるなり一個の生物にして能く無數の兒を生ずるを得ば其兒の甚しく保養の機會を失ひ殆ど皆死するも辛じて生き残れる一二個の兒は復た無量の兒を生ずるを得可し又生物にして兒を生ずるが爲めに其胎中の滋養物質を費すこと多き時其身の爲めに費す滋養物質少きこと明なり則兒を生ずる爲めに母の其身を勞すること多く其甚しきに至ては兒を生ずるや母の直に死する者あり如此事高等の生物に無きことなれども最下等の生物には稀ならず種類繼續の方法一ならずして第一に一個の生物にして無數の兒を生ずると同時に殆ど己れの生命を失ふ事あり次に生物の其胎中の滋養物質を其胎兒に供すること大ならずして久く己れの生命を全くする事あり次に生物其胎兒の爲めに殆ど全く其胎中の滋養質を盡し胎兒は其數少くして各受けたる滋養多きを以て死すること少きこと有り此三法の内第一の場合に於ては親子ともに損害を受くるなり第二の場合に於ては子の損害を受くること大なり第三の場合に於ては損

害親に多くして子に小し

凡そ生物の其子を生ずるや下等の生物にありては親の子の爲め；自ら勞すること甚しく上等の生物にありては親の子の爲めに自ら勞すること甚た少しプロトソアといへる極小の生物其の子を生ずるや直ちに死す是より高等の生物に於ては其の子を生ずる後に於て暫くにして死す是等皆其の身を犠牲にして其の子を生ずるなり高等の生物に於ては牝牡の其の子を生じたる後久しく生命を保つ物あり是れ高等生物は多年を隔て、子を生じ又一回に子を生ずること少なきが故なり故に牝は既に子を生ずる能はざる老年に達したるも尙ほ能く生命を保つを得牡は殆んど全く其子の爲に己れの身を害ふことなし

斯の如く高等の生物は其の子を生ずる爲めに己れの身を害ふこと少なきのみならず又子を生ずるに因て大に己れの身を益することなり何といふに下等の生物は其の子を生ずるや直に是を棄て自ら他にゆくが故に親に於ては子を養ふの勞なしと雖ども子を養ふより生ずる快樂を享るを得ざるに高等の生物は其の子を養ふの勞多きに係はらず子を愛するの情感に因て自ら慰むこと多く以て其の

生命を延るを得なければなり

凡そ世俗の人男女の關係則ち夫婦の關係を論ずるや此の關係に因て生ずる幸福は夫婦間の幸福に限るとして他に及ばずといふが如しと雖ども大に誤れる見解なり社會學者はこの俗人の見解に反對したる見解を有するものなり何といふに家族組織の善惡良否は其の社會保全に適合するや然らざるやにありて社會保全は社會を組織する人類の長く其の種族を繼續するをいふ凡そ人類の長く其の種族を繼續するを得るは決して人類諸種族の一般に長く其の種族を繼續するに在らずして諸種類中弱き者は衰亡し強き者獨り長く其の種族を繼續するのみならず無限に其種族を蕃殖するにあり然れば家族組織にして一社會をして他の社會と競争して之を亡し其の人類のみを蕃殖するを得しむるものを以て其の社會に取て家族組織の最善極上なるものと云ふべし尤も最善極上と云ふも比較上の言にして決して純粹理想上の言に非ず

然れば家族組織は社會の保全と兩立すべく社會の保全は無數の健全無病の兒女を生じ能く此を成人せしむるに在り尤も野蠻社會にては時に或は人口の無限に蕃殖するを以て有益とせざる事あれども少年の夭死すること頻繁なるが故に少年の數大ならざれば能く其の種族を繼續せず

一社會全體の幸福兒童身體の健全能く此の二事を計るを得たる後に於て父母の幸福を論ずべし家族の組織夫婦の關係にして能く社會全體の幸福と兒童身體の健全を盡すを得る上に更に父母の生命を延長し是を延長するを得ざるも父母たるの負擔を軽減する事多きものを以て善良の家族組織優等の夫婦關係と云ふべし野蠻人種に於て兒童の死すること多きは吾人の毎に聞く所なり兒童の死すること多きは種々の原因あり第一に墮胎棄兒の習慣あり次に嚴寒早暍等の爲めに兒童の死するもの少からず又野蠻社會にありては男女の成人して子を生ずる期に達する事甚だ早きが故に男女一人一個の身體發達の時節を短縮するものと云ふべし男女壯健にして能く子を生ずる時男女の其の子を生じ此を養ふ爲めに自ら負擔する所重大なり野蠻社會に於ては夫婦の交情親子の愛情は夫婦兩親をして快樂を得しむること開化社會に於て見る所の如く大なるを得ず又野蠻社會の男女は既に子を生ずるを得ざる期に至りたる後は長く生命を保つ事なし或は

亂暴の所行を以て身を終り或は相棄相離れて身を誤る事あり或は夫婦居を共にするも兒童を看護する必要なきが故要害なくして早く自ら衰耗す
かく論じ來たれば道德上に於て最上の家族組織は又生物學社會學の上に於ても最上の家族組織と認定するべきものなるを知るべし

第二節 男女の關係

夫婦の關係を究め知らんとするには單に是を開化社會に於て究むべからず野蠻社會に就て是を究む可きなり野蠻社會に就て男女の關係を究むるに其の有様毫も禽獸の有様に異なる事なし禽獸の社會に於て牡は牝を得んと欲して相戦ふ常なり野蠻の人又女を得んとして相争ふなり野蠻の人種或は數男にして一女を愛する時角力をして勝たる者一人この女をわれのものにする習慣あり或る野蠻社會に於ては人にして他人の女を得んとする時はと戦ふ又數女にして一男に屬するもの互に争て此の男を己れ一人の專有とせんとする習慣あり又野蠻人種相戦ふ時敗者の婦女皆其の夫を去て勝者に従ふ事恰も兩頭の獅子相争ふ時牝獅子敗したる牡獅子を去て勝たる牡獅子に就くが如し斯の如き野蠻社會に於ては夫

婦の關係未だ固く定りたるに非ず世俗の人夫婦の關係は開闢以來一定したりと思ふべしと雖ども夫婦の關係にして明らかにたりたるは人類の大に進化したる後の事なり野蠻の域より開化の域に至る間に夫婦の經過したる關係は種々様々なり婚姻の儀式家族の組織時代に因て異なり今日の道德に因て見れば天理に違ひ人道に背けりと云ふ可き婚姻の儀式家族の組織昔時に在ては時人の天理人道に適合せりと思ひしなり

極下の野蠻社會には婚姻の儀式は無論婚姻の事實を顯はす言語なし斯の如き社會には男の能く女を奪ひ得たる事は即ち婚姻の成りたる證據なり少しく進みたる社會に於ては男女の夫妻たらんと欲するもの火を燃し是が兩脇に座して相見るを以て婚姻の儀式とす或は女の其の嫁せんと欲する男に贈るに煙草等を以てするを婚姻の儀式とす或は男女相合んと欲して先づ食物を盛りたる筈を其の間に置き互に食物を贈りて相食ふ斯の如き習慣は羅馬古代にも行はれたり

又野蠻社會に於て夫婦の關係親密ならず其關係の續くこと久しからず故に男女相合て夫婦の關係を立つるも是が爲に自から利すること甚だ少し夫にして其

の婦を捨ること隨意なり又一人の男にして數多の女を妻となし是れをして奴隸のすべき賤業につかしめ其内の何れをも飽たる時は直にすつ女子と雖共勢力ある時は隨意に其夫をすつること尙ほ勢力ある男子の其の妻をすつるが如し是れに因りて是を見るに世俗の人常に夫婦の道を以て元來神聖なりと云へども斯る夫婦の道は人間社會の初に在らざりしを知る可し

今日の人にして天理人道に背戻する習慣と云ふ所の野蠻社會に普通なるを見るに付けても亦夫婦の道は元來今日の人の思へる所と大に異なるを知る半開化の人民に珍客を優待するに一夜の妻を授くるを以てす或は一男にして數多の妻を有し其の美なるを撰みて貴賓に與ること有り或は已れの妻を人に貸して吝ならざるを以て大徳の譽とする者あり或は貧にして多く娘を有する時未だ是を人に嫁せざる前に色を鬻ぐを以て恥とせず或は新婦にして未だ嘗て男に觸れざる者を娶るを恥とするあり

夫婦の關係の整ひたること並に夫婦の關係に因て生ずる情愛の厚きことは共に長久進化の結果なりと云ふ可し其事開化人の禁ずる血族間の婚姻にして尙ほ

未開人種の内に流行するを見ても知らるゝなり子にして其實母と床を同くする者あり男にして其同母姉妹又は實の娘を妻とするあり古代白露國に帝王の必ず其實の長女を妻とする習慣ありき古代埃及國のトルミ^ト王家歴山大王の大將にして埃及を占領し歴山大王死後に埃及に王たりし者の子孫は兄弟姉妹にして夫婦になるを例とせり日本の上代にては異母の兄弟姉妹にして夫婦になり叔父と姪との夫婦になりたる例少からず

要するに政林等にして進化の高度に達したる社會には自から夫婦の關係亦大に進化したりと云ふ可し尤も之には例外の場合少からず

第三節 婚姻の種數

凡そ婚姻の種類に四あり一に男女雜多の婚姻二に一妻多夫の婚姻三に一夫多妻の婚姻四に一夫一妻の婚姻なり人類野蠻なりし時には數多の男と數多の女と相合て夫婦となるなり即ち男女雜多の婚姻をなすなり人類漸く進むに隨て一妻多夫の婚姻をなし又進みて一夫多妻の婚姻をなし又進みて一夫一妻の婚姻をなすなり尤も第一種の婚姻より第二種の婚姻に移る所を明に示すこと難し第二種

の婚姻より第三種の婚姻に移る所並に第三種の婚姻より第四種の婚姻に移る所均しく明に知り難し管に然る而已ならず一種の民族中に於て同時に二種以上の婚姻を兼有すること有り唯大躰上より論すれば此れは野蠻の社會に在り彼れは開化の社會に在りと云ふを得る者と心得べし

人類野蠻なりし時夫妻雜多の婚姻流行するも其間に一夫一妻の婚姻全く絶て無しと云ふに非ず况や一女にして數男を有する事等は必ず有りしならん扱夫妻雜多の婚姻より生ずる親族の關係必ず他の婚姻より生ずる親族の關係に異なるなり第一に數多の男女にして互に夫妻となる時必ず母の何人なるかは知らるゝも父の何人なるかは不分明なる兒女多かる可し斯る場合に於ては親子血統を索引するに父と子どもの間に於てせずして母と子どもの間に於てするなり女系の一旦行はれたる上は父の知れたる兒女をも男系に由らず女系に由りて取り扱ふに至る可し又夫妻雜多の婚姻に於ては兒女は其父を知る能はざる上に母を同くするも多くは父を異にするが故に兄弟姉妹の關係甚だ疎遠なり兄弟姉妹の關係甚だ疎遠なるが故に一家族の結合すること薄くして蕃息すること難し斯る家族より

成立つ社會は勢力多大なる能はず斯る社會には主宰の權增長すること難く祖先の祭祠並之に由生する宗教上の結合も廣大なる能はず要するに男女の關係粗惡なるよりして社會全躰の保持進化を妨ぐることも多し

男女雜多の婚姻にして少しく進化したるは即ち一妻多夫の婚姻なり一妻多夫の婚姻に四種あり第一に一女にして男の互に縁なき者數人を夫とし而して其夫亦一人毎に女の互に縁なき者數人を妻とする事第二に男の互に縁なき者數人にして一女を共同の妻とする事第四に男の互に兄弟の縁ある者數人にして一女を共同の妻とする事是なり第一種の場合にては子供の父は何人なるや不明なるがに各夫の子供通例數多の家に養育せらるゝなり例へば一夫にして子共三人ありて其一人は甲妻の生所一人は乙妻の生所一人は丙妻の生所なりとする時は此三人の子供各其生母の方に於て養育を受るなり子供の血統は決して父統に由るを得ず單に女統に由るを得べし故に各男は其思慮を一個の家族と一定の子數に限るを得ざれば之を數多の家族と不定の子數に普及せざるを得ず因て男の其家族を思ふ心

專一なるを得ずして家族の結合強固なるを得ず此家族の中に存する親類は第一に異父兄弟第二に異父姉妹第三に異父姉妹所生の子供是なり

第二種即ち男の互に縁なき者數人にして一女を共同の妻とする場合に於ては子供の父を知るは易からざるも一母にして子供を悉皆養育して一家族を成すを得可し此場合には男と云へども子供を愛するを得るなり子供の面貌男の面貌に類する事ある可し母能く子供の父を指定するを得る事あり第三種即ち男の互に縁ある者數人にして一女を共同の妻とする場合に於ては子供の父の不明なるは第二種の場合に均しきも男の子供に對し幾分の縁あるか故に其の之を思ふ念一層深からざるを得ず第四種即ち兄弟數人にして一女を共同の妻とする場合に於て子供は男の實子實女ならざれば實甥實姪なり故に男の子供に對する關係他の場合に比すれば尙ほ一層深し

數人の男にして一女を共同の妻とする事土地瘠惡にして人畜蕃息し難き場合には便利なる可し一女にして子供を生ずるに限なきを得ず數人の男にして子供を養ふが故に子供は衣食の不足を覺えざる可し故に墾る土地には一夫一妻の婚姻甚だ不便なり一妻多夫の婚姻一夫多妻の婚姻皆其起原を異にして決して一妻多夫の婚姻變じて一夫多妻の婚姻となり一夫多妻の婚姻變じて一夫一妻の婚姻となりたるに非ず一妻多夫の婚姻と一夫多妻の婚姻とが競争して一妻多夫の婚姻勝つ場合あり又は一夫多妻の婚姻勝つ場合あり之と均しく一妻多夫の婚姻は一夫一妻の婚姻との互に勝敗を争ふことあり一夫多妻の婚姻は一妻多夫の婚姻行はるゝ土地より一層豊饒なる土地に適せり一夫一妻の婚姻亦然り一妻多夫の婚姻をなす社會一夫多妻の婚姻をなす社會共に豊饒程度同等の土地に在りて相争ふ時戦死者の數を補填すること此れに於ては難く彼れに於ては易し故に此れ敗れて彼れ勝つなり

一夫多妻の婚姻は今代古代の論なく開化未開の別なく之を用ゐる社會の例少からざる而已ならず此婚姻は他の婚姻より廣く行はれたるが如し一夫にして數妻を期するは種々の事情に制限を受くること無しせば實際に行はれたるより猶一層廣く行はれたる可し此婚姻を制限する事情は一に土地の天然不饒にして人口繁殖を制限する事二に有力者は其力に任せ女を獲るが故に自から無力者は僅

に一妻を有し又は全く無妻ならざるを得ざる事是なり故に一夫多妻の婚姻を許す社會に於ては社會の男子皆數妻を有するに非ず一男にして一妻を有する場合も多からざるを得ず實に然る而已ならず何れの社會にも貧者は富者に比すれば多數なれば數妻を有するものは一妻を有する者に比すれば少數ならざるを得ず何と云ふに何れの社會にても男女の生るゝ割合畧ぼ相均かるべき筈なればなり抑も一夫多妻の婚姻は善く其の起る所以を知る時は其の世に流行せざるを得ざる者なるを知る可し野蠻社會に於ては腕力智識の他人に勝れたるは他人の上立ちて酋長軍將となるを得べき資格なるが多く妻を得るにも便利なる資格なり野蠻人は人の妻を盗みて之れを己れの妻とするを以て名譽とするが故に多く人の妻を盗むは名譽の大なる者かり妻を有する多少は其初め男子の強弱に由來するも其後には男子の貴賤上下を表する所以とするなり故に國王蠻酋は言ふ迄も無く凡そ一村落中にて上等の地位に在る者は其身分を表するが爲めに多く妻妾を有せざるを得ず又婦女子の勞力を利用し之を産業に供する社會に在りては經濟上の慾心は多く妻妾を有する所以となるなり新カレドニアには蠻酋一人にして妻妾二三十人を有するは妻妾増々多くして耕作増々容易收穫増々多大なるが故なり又何れの社會に於ても有力者富豪者の所爲は善惡是非の標準となるが故に有力者富豪者にして多く妻妾を有する時は自然其社會に於ては多く妻妾を有するを以て倫理天道に適合せる行爲と爲すに至るなり

一夫多妻の婚姻は夫妻雜多の婚姻に比して大に進歩せる所あるは言ふ迄も無く一妻多夫の婚姻に比しても尙ほ大に進歩せる所あるを證するを得るなり一夫多妻の婚姻に於ては小兒の父母共に明知するを得べし父にして其小兒を知ること明かなれば之を愛育すること厚かる可し隨て親子の關係親密なる可し又血統は父方に由るを得可く父方に由れる血統は母方に由れる血統より優等なる千萬なり一妻多夫の婚姻に於ては父と子との關係全く知る可からざるが故に單に母方によれる血統を用ひざるを得ず一夫多妻の婚姻は斯く男系を立て父子相續の法を定むるを得せしむるも小兒は父を同ふするも母を異にすれば自ら兄弟姉妹の間柄和熟すること難かる可し東洋諸國史上に見ゆる國王の嫡子と庶子との互に國を争ふは其原因多くは此に在り

社會にして四圍に仇敵の社會を有する時は自然戦争止むこと無く壯夫戦死すること絶えざる可ければ男子全躰の數をして減少せざらんことを注意せざる可からず此注意には一夫多妻の婚姻を許すを第一等の策略とす此婚姻を許す時は戦死者の妻妾は更に嫁するを得可し又既に妻妾を有する男子も斯る戦死者の妻妾を納れて己れの妻妾とするを得可し一野蠻社會の男子を分て(一)に妻を有せざる者(二)に妻一人を育する者(三)に妻妾二人以上を有する者とする時は凡そ妻妾二人以上を有する者は他に比して元來勇健富裕にして子孫を生ずる爲めに優等なる者ならざるを得ず斯る優等者の子孫を生ずるは單に社會の人數を増すが爲めに社會を強大にするに止らず其子孫にして其父の如く優等の性質を備ふるが爲めには社會に利益を及ぼすと莫大なり又一夫多妻の婚姻は男系を立て父子相續の方法を定むるを得しむるが故に社會の管理者即ち酋長をして父子其威權を相傳へ以て社會の管理を緩漫に付すること無く隨て社會全躰をして強大ならしむるを得るなり男系を立て父子相續の法を定むるより生ず可き其結果は單に此に止まらず祖先の祭祀之れが爲めに嚴重なるを得又之が爲めに發達進化するを得可

し祖先祭祀の發達進化は社會の秩序を立て社會の安寧を計るに便ならしむること莫大なり

一夫多妻の婚姻は土地豊饒ならざる場合に不便なれども土地豊饒なる場合には至便なり父子の關係を明知するを得る時は父の其子を看護すること充分なるを得可し土地豊饒ならざるも一人一個の上に就て云ふ時は此婚姻の便利なる場合もある可し例へば兄弟二人ありて兄の死して其寡婦小兒の由る所を失ふ場合に於て弟の之れを己れの妻とし之を己れの見として看護せんには雙方の爲に便利なること至大なる可し

一夫多妻の婚姻より生ずる弊害亦少からず一夫にして多妻を有する時は其數多の子女をして和熟せしむるを得ず數多の妻妾は其の居を同する時は無論各居を異にする時と云へども互に猜忌せざるを得ず斯の如き母に養はるゝ子女亦互に猜忌せざるを得ず數多の妻妾にして居を異にし其子女も隨て居を異にする時は父の其子女を思ふ心諸方へ散却して專一なるを得ず次に夫婦の情密なるを得ず婦にして既に見を生ずるの期を過ぐれば全く夫の愛顧を失はん男子は老して

後に妻子の眷顧を受くこと多からざれば不便を覺ゆること少からざるべし因て女子男子共に長命するを得ざる可し

一夫一妻の婚姻は他種の婚姻と共に野蠻の社會にも既に行はれたる而已ならず必ず行はれざるを得ざりしなり然るに野蠻社會に於ては有力者の無力者を壓し其妻を盗みて己れの妻とする事常なるが故に無力者にして僅かに一人の妻を有するも永く之を有するを得ざるなり故に野蠻社會にては一男一女の夫婦と爲ることあるも能く終身夫婦たるを得ず斯る一夫一妻の婚姻は決して完全したる者と云ふを得ず一夫一妻の婚姻を補助する所以は種々あり(一)に財産の思想發達し交易賣買の習慣起りたる事(二)に男女の數略均一に傾たる事(三)に優勝劣敗の原理に因て一夫一妻の婚姻が他種の婚姻に打ち勝ちたる事是なり他人の妻を盗むは全く腕力に由るが故に能く之を防ぐは獨り其夫の腕力なり去れば他人の妻を盗むは既に幾分の故障に制せらるゝ者なるが更に制限を受くる所以は女子賣買の習慣なり人にして貨物を交易賣買するを知り亦女子を賣買するに至るなり貨物を盗むこと止みて女子を盗むこと亦止むなり人にして其の買ひたる所の妻

を他人に奪れざらんと豫防し其竊盜に抵抗するは無代價にて得たる妻を奪はるる場合より遙かに熱心ならざるを得ず熱心の豫防抵抗は能く妻女の奪掠を制止するを得可し妻女賣買の習慣は妻女を得るを難くすると同時に夫妻の離婚を難くするなり男女の數にして畧ぼ均一になるは戦争の度數減少し男子の工藝に従事するもの多數になり男子の戦死する者至て少數になるに従て男子の數は女子の數に近附くを得可し男子女子の數にして略ぼ均一なるに一身にして多妻を有する者ある時は多數の男子は無妻ならざるを得ず此場合には謂ゆる怨婦曠夫の數もほかる可し此有様必然公議輿論の非難する所となりて永く成り立つを得ざる可し一夫一妻の婚姻は他種の婚姻と競争を爲すに當り特別の障害あるに非ざれば必ず之に勝つ可きなり

一夫一妻の婚姻に於ては母子の關係父子の關係共に分明なる而已ならず子女は皆父母を同くしたれば其間柄至て親和せり遠孫に至る迄男系女系を共に引くを得るが故に同族の結合親密なるを得可し土地豊饒なる時は一夫一妻の婚姻は一夫多妻の婚姻に比して人口を蕃殖するに大に便利なり何と云ふに社會の男子

各妻一人を有するは社會の男子中一部分は各妻二人以上を有するも他の部分は皆無妻なるに比して子女を生ずること遙かに多數ならざるを得ず次に此婚姻の社會に有益なるは社會の結合を鞏固ならしむることなり次に社會に有益なるは同父同母の兄弟は異父異母の兄弟の如く互に猜忌すること無きが故に一蠻屬の酋長一社會の主權者にして父子其權を相傳ふる際嫡子庶子の權を争ふと無きより酋長主權者の權力自から鞏固にして社會の管理善く往き届くを得るなり次に祖先の祭祀善く發達して社會の風俗を維持し社會の安寧を助成するを得るなり一夫一妻の婚姻子女の養育に便利なるは疑ふ可からざる事實なり何と云ふに父母共に一心に其子女を養育するを得ればなり夫妻の幸福は肉躰上より云ふも精神上より云ふも此婚姻に由て増進するを得可きなり野蠻社會に行はるゝ一夫一妻の婚姻は別段に婦女子を尊敬する情感を起すこと無しと云へども高等社會に於て此婚姻にして婦女子の位地を高めたること大なり妻女賣買の習慣廢れて良人撰拔の習慣起る良人撰拔とは婦女子の其良人とす可き者を撰拔するを云ふ男子の其情欲を達するが爲めに婦女子の得心をも得ずして力に任せて之を妻妾とするに反對したる習慣なり女子にして良人を撰拔するに至りては女子の男子に尊敬を受くると至大なり高等社會に於て一男一女の夫妻となりて得る所の情愛亦觀察なり夫妻の情愛親密なるか故に其幸福至大にして人生必伴の病苦を減少すると亦至大なり夫妻共に既に生見の年を経過したるも夫妻の情愛並に親子の情愛深厚なるが爲めに長生永命を保つを得且又老年必伴の病苦を除却すると至大なる可し

第四節 家族の種類

家族の組織は社會の組織と共に變化すとは明言すへからされども尙武社會と尙工社會と其家族の組織を異にするは斷言するを得るなり尙武社會とは英語に militant society ミレタントソサエティ と云ふ尙工社會は industrial society インダストリアルソサエティ と云尙武社會とは戦争奪掠を主務とする社會を云ふ尙工社會とは農作工業を主務とする社會を云ふ此二社會の互に家族の組織を異にするも皮相の見にては容易に知るを得す能く其社會の本性裏面を洞察せざるに非されは得ざるなり第一に尙武の氣象を輕重するには戦士の多少に由るへからず奪掠精神の多少に由るへし尙武社會の有様は其四周の禽

獸並に人類と相戦ふを主務とする有様なり尙工社會の有様は平安に工作に従事するを主務とする有様なり斯く云ふときは婚姻にして尙武社會に隨伴する者は一夫多妻の婚姻なり尙工社會に隨伴する者は一夫一妻の婚姻なりと揚言するを得るなり

第十四章 人天の關係

人の宇宙間の事物を見るや其未開野蠻の時代に於ては渾沌として夢中に彷徨するものゝ如く迷誤多くして曾つて其身の進歩發達を希はざるなり少しく進歩するも物理を研究する如きは至難の事たり何となれば一方には事物を研究して鬼神の冥罰あらんを恐れ又他方には小智にして之を研究するの能力なきなり即ち空間中の事物は多種にして且つ變遷限りなきが故に些少の能力を以て之を研覆すること能はざるなり抑も人間なる者は大宇宙大空間の一部分を占むるものなり換言すれば人間は小宇宙なり小空間なり故に大なる空間中に於ける小空間か其大空間は如何なるものと云ふこと又其大なる空間と人との關係如何と云ふこと等を知るが如きは難事にあらずや之を例するに井中の蛙の蒼空を望むが如く

にして到底其全軀を測知する事能はざるなり去りながら知らざるを知らずとして之を放擲せば將に何時か之を知るを得んや人知は之を討究するに依りて始めて進歩し發達する者なり人間は万有の一部分にして而して其万有より發達進歩せる者なり智(即ち腦)の如きは虚空進歩の終歸にして其の始めにありては智(即ち腦)の如きものあらざるなり如何となれば万有なるものは初めより有るにもせよ智覺なる者は一時に發生する者に非ずして次第に發生する者なればなり。

人の万有に對して有する位地に二種あり其一は人が万有に指揮せらるゝこと其二は人が萬有を指揮することなり万有に指揮せらるゝとは何ぞや曰く人間が原初に於ては万有の現象を其の有りの儘に認知するのみ即ち万有に連れて事をなすなり他語を以て之を云へば万有に先導せられて事を爲す然るに人は智識大に増進するに至て万有を使役するを得人が宇宙を研究するに當りて其の有様最も錯雜混亂にして迷誤に陥り易きは一方には万有なる者は際涯知る可からざるに又た他の一方には萬有は大なる團塊なれども其大團塊は無量なる小團塊の凝集結合に外ならずして其小團塊中の極めて微細なる者に至りては容易に感覺し得

べき者に非ざればなり是れが爲めに人間は常に迷誤に陥るのみならず迷誤の爲めに不慮の災厄又は疾病を生ずるなり換言すれば人は宇宙と如何なる關係ある乎又其分子は如何なる者乎等は絶えて之を知るなし即ち宇宙は水又は火より成ると言ふ如き種々の誤見に陥りて災厄を招き疾病に苦むなり是に由て之を觀れば万有の分子を研究すると云ふことは人間第一の義務にして其人間社會に及ばすの利益豈に尠なりとせんや

先づ人と其周圍との關係を知るに於て尤も簡單なるは物理上の事項なりとす即ち今日に於ては理化學の力に依りて之を十分に證明し得るなり是に次ぎて起る問題にして一層難澁なるは吾人活動の境界即ち智識、徳義、社交の境界に存する事理を研究するにあり而して一國の社交徳義を研究する者は其研究が國人の情感利害を左右するを以て必ず之れが酷評抗抵を受くる故に勇氣膽力を欠く可らざるなり

前述の如く人は其始め萬有の指揮を受けて其終りに之れを指揮するの地位に進むことに就きて詳言せん先づ萬有なる者は是もなく非もなく而も一定の規則の下に活動する者なり而して其萬有中獨り人間は知覺を有し感覺を備ふるが故に無是無非の萬有現象に就て或は快樂を感じ或は苦痛を覺ゆる者なり換言すれば人と人の周圍との間に起る苦痛快樂は獨り人のみ之を感覺するなり而して人なる者は既に指揮を受くる地位を超越して指揮を下す地位に進まば苦痛を避けて快樂を享け得るなり併しながら人間の苦痛なる者は全く之を免除すること能はざるなり何となれば人の境遇(即ち人の周圍)及び其性質模様は常に轉變する者なるが故に人は絶えず其周圍を敵として之れと苦戦せざる可からざればなり(吾人の周圍たる萬有は現象の本源たるに於ては原動なれども氣候を變じ電氣を利用する事などを知れる人と比較して云ふ時は原動たるを得ず即ち萬有は被動にして人は原動なり此事善く記應せざる可からず其著しきは一團結の人數は隨意に數を増加すること能はずして常に一定の數ならざる可からず即ち無限の繁殖を爲すを得ざるなり例せば人は生活するには飲食、衣服、住居、氣候等の必要あり而して其住所は一定の場所ならざるべからず然るに下等動物に至りては一疋の動物が生命を保維し其生長を遂げんと欲せば數千万疋の同種動物が之か犠牲たら

さるへからず即ち數千万疋の中僅かに一疋生きて他皆死す、然るに人間に至りては人の生死は此の如き比例に由らざるなり是れ其の靈智ありて生死の平均を計るを以てなり、即ち靈智あるを以て身を其境遇に適合せしむるが故なり而して此靈智は社會、政體、其他保護的の制度の由りて起る所なり、人靈智を有すれば愛他的の道德心を發し以て苟も其種族繁殖の妨害となる者は悉く之れを驅除せんことを計畫するに至るなり斯く人が生計上の便宜を計るに至るは全く經驗に由來する者なり而して經驗なる者は吾人を益する僅小ならざるも既往の經驗より得たる利益に慣れて將來の經驗も亦如此利益ある者と思ふは大なる誤謬なり何となれば文明の事相は極めて複雑繁多にして到底人智の伴隨し能はざる所なればなり之に加ふるに人事の研究に従事するは人間中實に僅少の部分を占むる學者社會に止まりて其説く所亦常人の了解し易からざる所なり故に社會は財産、智識、權力の不平均を生し撥亂解紛亦容易ならざるに至る故に人間一般の進歩發達を計畫せんと欲せば經驗に依頼せずして究理に依頼し即ち學問を勉め物理の普及を專一にせざる可からざるなり。

神工論、進化論

世界を論ずるに二派あり神工論(Teleology)と進化論との二派是なり所謂神工論中にも枝葉多々なれども要するに神意自在説、事變前定説、事變偶然説等なり、進化論とは英語の所謂(Evolution)にして一切の事物は委く原因結果の大法に支配せられ順次に變遷發達し決して偶然にあらざること證明する者なり

神工論の一派に樂世主義(Optimism)を唱ふる者あり此主義は厭世主義の反對なり今其要領を述べんに樂世主義論者の言に依れば凡そ宇宙間に存在出現する一切の事物は人類をして快樂を得せしめんとして造られたる者なり例へば精酒の今日にあるは吾人をして快樂を得せしむる爲なり若し今日に在る如きアルコール製の酒をして未開野蠻の人類に飲ましめば或は其人種を絶滅せしむるも未だ知るべがらず何となれば野蠻人は腦髓の微弱なるにも拘らず多量に飲酒するより疾病或は死亡する者あるに至るの恐あればなり然るに如此精酒の發明が野蠻人に出來ざりしは其幸なりと

又た同論者は云ふ地球の橙形なるは其運轉に便利なるが爲めなり氷の水より輕

きは大なる幸福なる可し何となれば若し氷重き時は氷漸く下降して遂には池中海中の水をして凝固せしめ解漸するの期なきに至る可し少年の際は事業輕舉の嫌なきにあらざるも活潑なるの長所あり老年に及べば不活潑なるが爲めに總べて事業を鄭重にし従つて輕舉を爲さざるの一得ありと云ふ此等の言今一々枚舉に違なし同論者は畢竟神は吾人をして好都合を得せしむる様に万物を造りたる者なりとす

今之れが反對論者の説を述べんに(反對論者は穴勝に厭世主義を唱ふる者にあらざ)曰く花の春に咲く木にして氣候の不順より秋に花を發する時花は果實を結ばざる可し神は何故に定時に花を咲かしめざるや松樹の外皮は龜傷せり是れ外部の發達が内部の發達と伴ふ能はざるに由る植木師は之れをして速に生長せしめんが爲めに外皮を掻き去ることありと云ふ豈に不都合の造化に非ずや動物には護身の爲めに針を身軀に備ふる者あり而して其針を以て他動物の皮膚を刺すに其の時としては皮膚中に入りたる儘になりて抜き取ること能はざるより之れを失ふのみならず之れを失ひたるが爲めに自分に害を招くことあり是れ豈に憐む

可きことに非ずや乳房八個を有する動物あり而して其動物にして子を九匹以上産出する時は大に不都合なるべし(一乳房を一匹の割合とすれば)彼の無人島に生息する信天翁^{バカ}は人を見れば之れに接近し遂に其の捕ふる所となる是れ如此信天翁を初めより造らざるの優れるに如かざるなり吾人の咽喉にトンシルと云ふ者あり之は通常何の効用も爲さずして而して往々疾病の原因となることあり疾病の發したる時は之を除去せざれば癒えざるに至る背骨は門衛や巡查の如き常に直立して居る者は遂に骨と骨との間に空隙を生し若し此人にして一朝疾病に罹り長く臥床する時は其間に掀衝を惹起すと云ふ是れ不都合に非ずや太陽の中心に黒點顯はるゝときは磁石其方向を誤り船舶不虞の危難に遭遇す日月星辰は光明を此世界に與ふる爲めに作られたりと云ふ果して然らば何故に神は虚空の爲めに人間の爲めに其望を全ふすること能はざることあるや何となれば日と雖ども月と云へども時としては光明を與へずして此世界の闇黒となることあればなり晝夜の配合を宜くせば其便利至大なる可し即ち二十四時間の中十六時間明にして八時間闇なれば好都合なり今の如くにては一年中平均四時間づゝ夜に入り

て働かざるを得ざるの割合となる云ふ實に大なる不便ならずや數の位取りの如きも自乗偶數ならば大なる便利なり十(即ち 10×10)と云ふ數の如きは不便なり八は $(8 \times 8 \times 8)$ 好都合なり然るに世人未だ八の位取りを用ゐず斯くも世に不便のみ多きは何んぞ能く神工論を破るに足らざらんやと神工論の反對者は云ふ。

以上列舉し來れる例證に就て其論の優劣を判せば樂世主義の論破れざるを得ざるが如し。

教

社會學終

14
226

IT 31

終

